

国境のある家

八木柊一郎

登場人物

中年の男

中年の女

老人

老女

若い女

若い男

女1

女2

女3

アンドレ・ジャックもしくはアンドリュウ・ジャクソン

闇の中に波の音がきこえてくる。

すぐにたかまる。不遠慮に氾濫する。

海岸という説明を逸脱した、おそろしくリアルな波の音である。舞台が見えてくる。

波の音の意味がわかってくる。

中年の男、これという特徴のない日曜日のサラリーマンといった男が、二つのスピーカーを結ぶ線を底辺とする二等辺三角形の頂点に位置を占め、丸太のツールに浅く腰かけて波の音を聴いているのだ。音はコンパクト・ディスクの再生音らしい。

ソファが一脚。扉がひとつ。だが、場所は森の中のようにもある。セラミックスタンドの上に置かれたスピーカーセットは、その森の樹々の間に立っている。

中年の男、波の音にぞくぞくするような満足を感じながら腰を浮かし、リモコンで音のレベルを落とし、床の電話をとってダイヤルを押す。

中年の男 ……（相手がやっと出る）あ、奥さんですか。赤沢ですが、黒沢君……、すみません。（じっと待つ）……あ、黒沢君、やっと、（と、いきおいこむがすぐ凶星をさされ苦笑しながら）……そうなんだ、朝からずうっとさ。やっと音が出たよ。できたよ！ ……うむ！……いや、ブルックナーじゃない。音楽じゃなくて、波の、インド洋のね、セーシェル島に打ち寄せる波の音さ。……そうそう、CBSソニー38DG28、長岡鉄男がCDベストスリーにあげてる例のあれさ。……うん、素晴らしいよ。昨日まではもう、波がねばねばしてね。……そう、まるでドブが流れてるみたいなの……。どう？今からでもきき聴きにこないか。第三京浜もう空いてると思うけどね。東名から十六号横須賀道路っていうのも結構早いの。……え？ アメリカへ転勤？ ……テネシーの工場へ？ きまったのかい。……なんて早く云わないの。……いやあ、知らなかったよ全然。きみだけかい。……ああ、この間事故に会った青井君の代りか。……だめらしいって？ ……かわいそうに、結婚したばかりなのにねえ。

若い女、「ただいまあ」と、下手から登場。

若い男、上手から古雑誌をひと山かかえて登場。

中年の男 スピーカーの間隔？ うん、ちょっと狭くしてね、ウーハーの中心距離が百七十二センチ。五度内側に振ってリスニングポイントの角度が四十三度。（若い女と若い男、だまってすれちがい、上手と下手へそれぞれ退場）いや、置き台は相変らずノリタケのセラミックだけどね、内のりを四センチ広くしたよ。……プレイヤーに二・五キロの鉛を二本。アンプには四本。……CDスタビライザー？ いや、あれはまだ……あれは疑問だよ。（若い男、手ぶらで戻ってくる）うん。今日はね、ボリウムを十一時まで

上げてみようと思うんだよ。そう。

老女、扉から登場して、「あ、マモル。あんた今、あいてる？」

若い男「もうじき出かけるけど」

老女「じゃ、私を送って」

若い男「どこ？」

老女「鎌倉、大塔宮」と、退場。

若い男「わかった」

若い女、着替えの途中で出てきて、「マモル。あんた今日、ウインドサーフィン使わないわね。」

若い男「ああ、使わない」と、退場。若い女も退場。

中年の男（老女の「私を送って」からダブって）次のソースはマーラーの第四番。……そうそう、マルチマイクじゃなくてワンポイントのツーチャンネル録音。……全く、マルチマイクでトラックダウンっていうのは意味ないんだよねえ。これからはまあ、マイク二本のデジタル録音っていうのが主流になるんじゃないかねえ。（再び一人になる）……市長選挙？ ああ、たけなわだよ。……そう、人口六万の街にしちゃあ注目度抜群……、うむ、どっちが勝つかねえ。女房は、千五百票の差で自分たちが勝つって云ってるけどね。

老人、登場。鏡の前で服装を見る。

中年の男 ……そう。前の市長をリコールしたパワーっていうのがそもそも三十代四十代の奥さん連中でね、共産党も社会党もそれにつられて、

老人 散歩に行ってくる……。

中年の男 うん、今度も政党の協力はことわってるらしいよ。

老人 (正面を向いて発声練習のように) 心あらん人に見せたきは、此頃の富士の曙! ……徳富蘆花。

(扉の前で) 散歩に行ってくるよ。

中年の男 (わかったと大きく首を振って) もちろん…… (老人退場) え? 女房? うん……。リーダーってわけじゃないけども、今日も宣伝カーに乗ってるんじゃないかな。

若い男、また古雑誌をかかえて出てくる。

中年の男 ああ。じゃ、あした。(若い男、退場) いやあ、とにかくきみに報告したくなってね。ついさっきまではひどい音でさ、死にたくなかったよ。……ふふふ、生き返った生き返った、もう大丈夫。問題は要するに、

若い男、戻ってきて何かにつまづく。

中年の男 (若い男に) さっきからなにしてるんだい。

若い男 部屋を整理してるの。(退場)

中年の男 失礼。問題は要するに、(若い女、登場) スピーカーの間隔と、(鏡におかう若い女を見つめる) 置き台の間隔の、相関関係にあったんだと思うよ? 全くむずかしいねえ……。じゃ。……。うん。……。どうも。(電話を切る)

若い女 行ってきます。

中年の男 どこへ行くんだい今かえってきたばかりなのに。

若い女 海岸。……。海岸へ行くの。(下手へ)

中年の男 ミツコ。

若い女 なによ……。

中年の男 この間おまえが連れてきたアメリカ人の友達……。

若い女 アンドレ?

中年の男 アンドレ? アンドリュウじゃないのか。

若い女 ママがフランス系で子供の時からアンドレって呼ばれてたんですって。本名はアンドリュウ・ジャクソン。

中年の男 アンドリュウ……。ジャクソン? この間おれに紹介したときは、アンドリュウ・ジャックだったぜ。

若い女 ほんとはジャクソンなの。

中年の男 アンドリュウ・ジャクソンっていや、アメリカの有名な……。からかわれてるんじゃないの? お

まえ。

若い女 七代目大統領アンドリウ・ジャクソンとおんなじ名前でいやだから、アンドリウ・ジャックとかア
ンドレ・ジャクソンとか適当に使い分けてるんですって。お父さん、そんなに彼のこと気になってたの？
中年の男 ベつに。……唯の知り合いってだけで、まだ友達ってところでも行ってないんだろ。……え、ミ
ツコ。まだ友達ってところでも行ってないんだろ？

若い女 そうねえ……。でも、友達っていうプロセス、とび越すこともあるわよ……。 (と、退場)

中年の男 ふん、そんなおどかしたって……。

老女 (登場して) ノブオ！

中年の男 …… (びっくりする)

老女 俳句の会に行ってくるよ。 (元氣一杯)

中年の男 ……鎌倉ですか。

老女 そう。俳句は鎌倉。七宝は茅ヶ崎。紙人形は逗子。

中年の男 趣味が多くて……。

老女 ええええ。おかげさまで。

若い男の声 おばあちゃん、支度いいの。

老女 ああ、とつくにいいよ。

若い男の声 じゃ、今行くから。

中年の男 …… (波の音、すこし上げる)

老女 ……この波、どこの海の。

中年の男 インド洋。

老女 インド洋……。さすがだねえ。逗子の海にはこういう大波はこないねえ。

中年の男 今は逗子にも大波が立ってるんじゃないんですか。

老女 え？ ああ、市長選挙のこと？

中年の男 ええ。

老女 あんたはどっちに投票するの。米軍住宅受入れ派に投票しろって、会社から云われてるんじゃないの？

中年の男 そんなこと云われてやしませんよ。

老女 ……（大きく笑う）

若い男 （登場して）お待ちどうさん。

老女 ご苦労さん。……行き先、大塔宮だよ。

若い男 わかつてる。

中年の男 マモル、車あんまり飛ばすなよ。気をつけて行けよ。

若い男 ああ。（退場）

老女 あんたも気をつけて。……ねずみにさらわれないように。

中年の男 はいはい。

老女 じゃ。（退場）

中年の男 行ってらっしゃい。

車のエンジン始動の音がきこえる。

中年の男 ……さて。 ……ひとりになった。(わくわくしながら) 十一時…、ボリウムを十一時に…。

(アンプに近づき、ボリウムを上げると)

波の音のなかにひどい音質の女の声はいつてくる。中年の男、舌打ちして、丸太のストールよりすこし前に坐りこむ。

女の声、大きく、はっきりときこえてくる。

スピーカーの声 市民の皆さん。池子の貴重な緑を守りましょう。池子弾薬庫接収地に、米軍住宅を建てさせてはいけません。逗子市長と、私たち逗子市民が、一致して米軍住宅に反対すれば、国も、住宅建設を強行することはできないのです。池子の緑を守り、真の民主主義を守る市長候補、ニモト仁本良吉、仁本良吉を、どうか、よろしくおねがいます…。

声、遠ざかり、中年の男、リスニングポイントに戻る。すると、中年の女、登場。男の妻である。

中年の女 ……あなた。

中年の男 ……？

中年の女 ……あなた、そういう気なの、とうとうそういう気になったの。

中年の男 ……なんだい。

中年の女 これよ、この音！（アンプに近づく）

中年の男 おい、さわるな。（先にかげより、ポリウムをゼロにする）……音が、どうしたって？

中年の女 宣伝カーが近づくのがわかって、ポリウムを上げたんでしょあなた。

中年の男 え……。

中年の女 よりによって思わせぶりの波の音なんか、すっごく右翼的に聞こえる波の音なんかひびかせて私たちの声を妨害するなんて……。ほんとにあなた、そういうつもりになったの。米軍住宅反対運動に反対する意志を鮮明にしたの。そうなの？

中年の男 おれは、べつに。

中年の女 宣伝カーのひとたちはここが私のうちだってことはみんな知ってるんですからね。その私のうちから大波なんかがきちがいじみたポリウムで出ていくらこっちが声を張り上げても負けちゃうってわかった途端、みいんな変な顔して私を見たわよ。たまらなくなって私、車をおりてきたのよ。

中年の男 おれはそんなつもりは全然。

中年の女 あなたの気持を正直に云ってちょうだい。私の行動には干渉しない自由だなんて云っておきながら本当はやっぱりそうじゃなかったのね。

中年の男 おれは波の音の、いちばん近くにいた。だけど選挙運動の声はようくきこえたぜ。ということは近所の誰だっけようくきこえてたってことだろ。妨害する気なんか勿論なかったけど、実際のところ妨害なんて全然してなかった筈だよ。

中年の女 あなたは、私たちの声をうるさいと思って、オーディオのポリウムをフルに上げた、それを云ってるのよ私。

中年の男 フルに、フルに上げた？

中年の女 ええ。

中年の男 冗談じゃない。(身をよじって) おれはまだ一度も、一度もだぜ、このアンプのポリウムをだ、フルに、(腕をまわして) こうやっていっぱいにまわしたことはない。ないんだよ。いっぱいどころか、(腕を九時の高さに上げて) ここまで九時か九時半の高さで精一杯だ。せめて十一時、真上の十二時とは云わないが、せめて十一時まで音を出してみたいと思いつながらそれが出来ない。ぎりぎり九時半で我慢してるっていうのにフルとはなんだい。え？ フルっていうのは、高嶺の花の十二時をはるかに越して、午
前二時、三時……五時。ああ、そこまでつまみをまわして音を出したら……、どんなだろう、ほんとに、どんなだろう……。でもまあ、このうちの造りじゃあ無理だろうね。壁も天井も床も、びりびり鳴り出してどうにもならないだろうね。

中年の女 (あきれて、落着く) ……ほんとに、妨害するつもりではなかったの？

中年の男 そんな子供だましなことしてどうなるんだい。

中年の女 だから、そういう子供だましみたいのことをあなたがはじめたのかと思ってびっくりしたのよ私。……わかったわ。……じゃ、今度宣伝カーがきたらポリウムを落してね。なるべくならゼロに。

中年の男 ……

中年の女 ……いや？

中年の男 スピーカーをデッドにするよ。ヘッドフォーンのラインだけ生かす。

中年の女 そうよ。最初からそうしてくれればよかったのに。ヘッドフォンなら、それこそフルに上げて
も。

中年の男 ばか！ このスピーカーから出る音が、ここの空気を振動させておれの耳に達するそのクオリテ
ィが問題なんだよ。それがすべてだ。ヘッドフォンの音も馬鹿にはできないが、それはそれで全然別の
世界に属する。

中年の女 ……わかりました。……じゃ、よろしく。

中年の男 さっき、黒沢君に電話したら、

中年の女 ……

中年の男 アメリカへ転勤だってさ。急にきまったらしい。

中年の女 そう……。奥さんも一緒に行くのかしら。

中年の男 どうかね。

中年の女 ……おひるは、おかあさんにおねがいしといたから。

中年の男 鎌倉へ出かけたよ、俳句だ。

中年の女 あら。今日は何にもない日だったと思うけど。……変わったのね。……じゃあ。

中年の男 ガーリック・オイルのスパゲッティをつくる。パセリのみじん切り……

中年の女 冷凍してあるわ。……どうも、おじゃましました。

中年の男 ……こちらこそ。

中年の女 ……ずいぶんご無沙汰してるけど、選挙がすむまで、待ってね。夜になるとくたくたなの。

中年の男 そんなこと、わざわざ……

中年の女 そう。ご無沙汰がちっとも苦になってないってわけね。失礼しました……（と、扉の方へ行きながら）今日ね、午後から私、池子の森へ行くの。

中年の男 え？ 弾薬庫のあるところへ入るのかい。

中年の女 弾薬庫っていったって今は建物だけよ。それにまわりの森はもともと唯の森ですもの。何にも危険はないわ。

中年の男 危険じゃないか。接收地の中へ入るっていうんだろ。無断で。

中年の女 接收地じゃないところからちよつと境界を越えるだけよ。誰も警備なんかしてないってことはわってるの。

中年の男 おい……変な冒険はよせよ。森の中へ入ってどうしようっていうんだい。

中年の女 まだ実地に見てないひとが森を直接見たいっていうのよ。

中年の男 見てから仁本さんに投票するっていうのかい。

中年の女 そういうわけじゃないけど。

中年の男 ……ちよつと。

中年の女 なあに。

中年の男 ……ちよつと来いよ。

中年の女 ……（微妙にためらう）

中年の男 誤解するなよ。ミツコのことだよ。

中年の女 ミツコ？ うちにいるの？

中年の男 いや。出かけた。あのアメリカ人とまた会うんじゃないかな。

中年の女 アンドリウ・ジャック？

中年の男 本当の名前はアンドリウ・ジャクソンだっせ。ふざけてるよ全く。……アンドリウ・ジャクソン、知ってる？

中年の女 もちろん知ってるわよ。ほんとなの？ ほんとにあのひと、アンドリウ・ジャクソンっていうの？

中年の男 ミツコはそう云ってた。

中年の女 (感動して) まあ……そう……

中年の男 何も昔の大統領とおんなじ名前だからって……

中年の女 唯の大統領じゃないのよ。あなた、ジャクソン・デモクラシイって、知ってる？

中年の男 ジャクソン・デモクラシイ？

中年の女 いえ、正しくはジャクソニアン・デモクラシイ。アメリカはね、一八二八年にジャクソンが大統領に当選するまではまだデモクラシイの国とはいえなかったの。マサチューセッツとコネチカットの特権階級が政治と経済を独占して普通選挙権もなかったの。それを変えたのが、市民全部が政治に参加できるようにしたのが、七代目大統領アンドリウ・ジャクソンなのよ。

中年の男 ……市民全部といっても、黒人は別だったわけだろ。

中年の女 それは当時としてはまだ。考えてみてよ。日本で普通選挙が実施されたのはそれより百年あと、一九二八年よ、昭和三年よ。

中年の男 ……思い出した。アンドリウ・ジャクソンは、インディアン殺しで有名な、軍人だったんだ。

中年の女 ……軍人、

中年の男 そう。汚ない軍人さ。野蛮人でもなんでもない本当のアメリカ人のチェロキー族を、美しいアラチアの、麓からはるか西方へ追い落した。つまり、成功したカスター將軍さ。カスターは途中でインディアンに殺されて大統領になれなかった。ジャクソンはうまく生きのびた。インディアンから奪った土地をきみのいう一般市民に大盤振舞して、大統領になった。インディアンを殺して大統領に！

中年の女 ……

中年の男 知らなかったのかい。(それほど侮辱的ではなく)ざまみろ。

中年の女 (やはりそれほどきびしくなく) あなたは自分のなかに確固とした思想もないくせに、唯いやがらせのためにそんなこと云ってよろこんでるのね。恥知らず。

中年の男 きみはあのアメリカ人の名前がアンドリウ・ジャクソンだとわかって、仁本陣営のマスコットにでもしようと思ったの。お笑い草だね全く。

中年の女 (扉の方へ行きながら) 今夜あたし、夕飯も事務所ですますかも……

中年の男 わかった！

中年の女 ……あなた。……怒らないで。仁本さんが当選しても夫婦の間が気まづくなったら何にもならないわ。

中年の男 おれもそう思ってる。こんな選挙でおれたちが気まづくなっちゃいけない。

中年の女 ……こんな選挙って、なに。

中年の男 ……

中年の女 いいわ。議論はやめましょう。無駄だわ。

中年の男 そう。無駄だ。

中年の女 …… (退場) …… (すぐに顔を出す) これから夕方までひとりっきりになって、思いきりオーデオイオが楽しめれると思ってるわくわくしてるんでしょ!

中年の男 ああ、わくわくしてる。(ディスクを替える)

中年の女 どうぞ、ご存分に。

中年の男 きみは選挙に勝てるっていう期待でぞくぞくしてるんだろ。

中年の女 ええ、ぞくぞくしてるわ。

中年の男 どうぞ、ご自由に。

中年の女 ありがと。(退場)

中年の男 …… (正面を向いて立つ) では。グスタフ・マーラー・シンフォニー第四番。エリアフ・インバル指揮、フランクフルト放送交響楽団、ディスクナンバー、デンオン、33C3717952。(リモコンを持った手を真横に伸ばし、スタートのボタンを押す)

マーラーの第四番、第一楽章が流れはじめる。

照明が変わって行き、舞台前面にも樹々がおりてきて、ソファや扉をかくしてゆく。

中年の男のこともかくしてゆく。

森の中である。

緑の底へ、幾条にもわかれて射す光線が、美しい。
音楽がつづく。

シャンシャンという鈴の音ではじまるト長調の第一楽章は、いかにも楽しげだ。
その無邪気なよろこびに乗って、中年の女とその仲間が登場。
女たち、踊るように、回転するように動きながら、

女1 ……わア。 ……きれい。

女2 きれい……………。

女3 ……静か。

女2 静かねえ……………、

女1 空気がおいしい。

女2 おいしいわ。

中年の女 境界線から一步入ると、まるで別世界でしょ。

女1 ほんと。

女2 ほんとに別世界。

女3 これなのね。これが、
中年の女 照葉樹林！

一同、遠くや近くを指し示しながら、

女1 ……マテバシイ。

女2 クリノキ。

女3 トチノキ。

女1 ハシバミ。シラカシ。

女2 イヌツゲ、ヤブツバキ。

女3 キブシ ヤマフジ ユズリハ。

女1 ハンノキ ハゼノキ ハリエンジユ。

女2 モチノキ ネムノキ ナラ、クヌギ。

女3 オオシマザクラ、ヤマザクラ！

一同、沈黙。

女1 この森と、この下の平地を自由につかって……

女2 敷地をアメリカ式に充分とって、

女3 アメリカの軍人とその家族の家を建てるというわけね。
女1 家と、
中年の女 それから
女2 野球場と、
中年の女 それから
女3 もうひとつの野球場と、
中年の女 それから
女1 子供用の野球場と、
中年の女 それから
女2 陸上競技場と、
中年の女 それから
女3 テニスコートと、
中年の女 それから
女1 スイミングプールと、
中年の女 それから
女2 病院と、
中年の女 それから
女3 見張り小屋と、
中年の女 それから

女1 有刺鉄線と、

中年の女 それから

女2 ゲートと、

中年の女 それから

女3 ……お花畑と。

女1 (叫ぶ) アメリカのどの司令官が云い出して日本のどの大臣が請け合っただのか知らないけど、私たちが馬鹿にするのもいい加減にしろって云いたいわ。

女2 この森にはオジロワシだっているのよ!

女3 私たちを馬鹿にしてるのは、アメリカなの? 日本の政府なの?

中年の女 日本の政府が私たちを馬鹿にしてアメリカの云いなりになれば、アメリカは馬鹿にされた私たちを通して日本の政府を馬鹿にするようになるでしょうね。

女1 じゃあ、私たちが云いなりにならないことは、本当は日本の政府にとってもいいことなんだ……。

中年の女 私はそう思うわ。

女2 ねえ。もうすこし先へ行ってみない?

女3 大丈夫?

女1 行ってみましょう。(歩き出す)

中年の女 待って。あんまり奥へ行つてはだめ。

女1 あら……。ほら穴。

女2 ほんと。むかしの防空壕ね。

女1 もっと古いものよ。……お墓よ、鎌倉時代の。(中をのぞき、一歩入った途端悲鳴をあげて逃げる)

ほかの二人も一緒に逃げてかたまる。

女2 ……どうしたの。

女3 何を見たの。

女1 ……ひとがいるのよ。

女2 ひとが？

女3 ……死人？

女1 ……(首を振る)

中年の女 ……(ほら穴に近づきかけると)

ひとがほら穴から出てくる。

女たち、また声をあげて逃げる。

ひとは、赤沢家の老女。

中年の女 ……おかあさん。

女1 ……(よく見て) まあ。赤沢さんの、

老女 こんにちは。

女1 (半信半疑で) こんにちは……。

老女 ここで、皆さんにお会いするとは思わなかったわ。……よくいらっしやいました。

中年の女 ……

老女 私、あなたやノブオが心配するといけないと思って、今までだまっていたの。……どうどう見つかってしまったわね。

中年の女 おかあさん。すぐにここを出しましょう。ここは、入ってはいけないところなんです。私たち、境界線を、つい越えてしまって。

老女 まあ、そう云わずに。大丈夫よここは。誰もこやしませんよ。

中年の女 でも。

老女 ここはね、私の場所なの。ここへくると私、息がつけるの。いいえ、生きかえるの。子供になるのよ！

女3 それはわかります。私たちも今、そんな気持ちに。

老女 あなた方も、思い出があるの、ここに。

女3 ……いいえ。思い出というものは、ありませんけど、それでも。

老女 私は、父に連れられて、三つか四つの頃初めてここを歩いた時のことをおぼえてるの。あんまりはつきりその時のことをおぼえているもんだから、自分の年を勘定してみても何だか頭がおかしくなるみたいに思うの。だって、それから七十年も生きてきたっていうのに、ここを歩きたいちばん初めの思い出がいちばん私には生き生きしてるんですもの。その間のことは何もかもぼやけてまるで消えているんですもの!?

(陽気に) ほんとに不思議!

中年の女　ここだったんですね！　赤沢家の土地。

老女　そうよ。ここが、赤沢家の土地だったの。

中年の女　……そうですか。ここがそうだったんですか。

女1　……そうですか。赤沢さんのおたくの。

女2　いいところですねえ……。

老女　ええ。

女1　あなた、今まで知らなかったの。

中年の女　もちろん接收地に赤沢家の土地があったということは知ってたわよ。でも、どこっていうことは。

老女　（女たちに）私は家つきで、もともと赤沢家の人間でしょ、主人は入り婿なの。だから主人もこの山のことは知らないのも同然。結婚するちょっと前にこの山、国にとられてしまったのよ。

女3　むかしは日本の軍隊が、やっぱり弾薬庫として。

老女　ええ。土地をよこせて云ってきたのは陸軍さんだけど、土地を使ったのは横須賀の海軍さんだったわ。

中年の女　でもおおかあさん。ここへ入ることはもう、おやめになったほうが。

老女　いいえ、ここがこうして昔のままである限り、月に一度は私、通うわ。

中年の女　……月に一度、

老女　そうだ。皆さん、せっかくいらしたんだから、この際赤沢家の土地を隅々までご案内しましょうかね。

中年の女 おかあさん。今は、赤沢家の土地ではないんです。

老女 わかってますよそれは。赤沢家の土地だったのは昭和のはじめまで。そのあとは国にとられて、今はアメリカにとられて……。でも、それでよかったのよ。公有地になったおかげで自然が自然のままにのこったんですもの。そうでしょ。

中年の女 それが今、変ろうとしているんです。だから私たち。

老女 変るのは世の常よ。仕方がないわ。

中年の女 そう云ってはいは。

そこへ、ものかげから、

若い男の声 おばあちゃん！ まだそこにいる？

老女 ……いるよ！ ここにいるよ。

中年の女 あれは、

老女 そうよ。マモル。

若い男の声 まだかえらない？ おばあちゃん。

老女 いえ、もう帰るわよ。今行きます。

若い男の声 こっちから海岸が見えるよオ。新発見だ。

老女 知ってる！ 一カ所だけ、海が見えるところがあるのよ。

若い男の声 なぜ今まで教えてくれなかったの。

老女 秘密にしていたわけではないわ。……あ、マモル。海岸にいま、おじいちゃんが行っている筈なの。見える？

若い男の声 見える筈ないだろ。

老女 (笑って) それはそうね。……じゃ、ケイコさん。

中年の女 ……(なぜかどきっとする)

老女 (女たちに) ごめんください。失礼します。

中年の女 おかあさん。マモル、おかあさんがここへ来ること、ずうっと知ってたんですか。

老女 ふふふ。そうなの。この頃はいつも、マモルと一緒に歩いてきてくれるの。ここへ来るときは、鎌

倉、大塔宮！ っていうのが合言葉でね。

中年の女 じゃあ、鎌倉の俳句の会っていうのは嘘だったんですか。行ってなかったんですか。

老女 ええ、まあ……。

中年の女 じゃあ、茅ヶ崎の七宝も逗子の紙人形も、本当はなにかほかの。

老女 七宝と紙人形はちゃんとしています。

若い男の声 おばあちゃん！

老女 はーい。……じゃみなさん。さようなら……。 (退場)

中年の女 ……。

女2 ……おたくのおばあちゃん、……なんていうのかしら。

女3 (遠慮がちに) すこし、おかしくはない？

中年の女 ……ここに来ることは、とにかくやめさせなければ。

女1 そうよ。あなた、よく云い聞かせなければ。……さ、私たちもかえりましょう。

女たち、動き出すが、中年の女、動かない。

中年の女 おばあちゃんはマモルト、おじいちゃんは娘のミツコと仲が良いわ。お互い、責任がないからでしようね。一家の主人の赤沢も殊更無責任をよそおってみんなと仲良くしようとしている……。うちの中で、まるで私一人が責任をもっているように思われてくることがあるわ。そのくせ、いったい何の責任を持っているのかわからないの。ほんとにわからない……。

女1 私もよ。……おんなじ。

女2 私も……。

女声コーラスがきこえてくる。

「真白き富士の嶺、緑の江の島」七里が浜哀歌である。

舞台、海岸へ変っていく。

海岸の砂浜。背景にウインドサーフィンのボードが密集し、屹立している。

老人が流木に腰をおろし、楽譜を見ながら手で軽く調子をとっている。

「……恨みは深し 七里が浜辺」

と、歌が終り、老人立ちあがる。

老人 結構でした。わたくしがお渡しした楽譜どおりに明るい長調で、八分の六拍子で、正確にうたってくださいました。そうなんです。この歌はそもそも、アメリカはヴァージニア州のガーデンというひとが作曲した *When We Arrive at Home* つまり、われ等が家に帰る時という希望にあふれた歌曲だったのであります。

若い女 (すこし前に登場して、げげんそうに老人を見ていた) ……おじいちゃん。

老人 やあ。ミツコか。

若い女 なにしてるの。

老人 来週、市のカルチャー教室でちょっと話をするんでね、その練習さ。

若い女 そうなの。おじいちゃん、おかしくなったんじゃないかと思って、今、心配しちゃった……。

老人 おまえは、ウインドサーフィンかい。

若い女 ええ。でも、ちょっとまだいいから…… (坐りこんで) 私、生徒になってあげる。聴き役になったげる。

老人 そうかい。じゃあ……。私はべつに、ひとりでもいいんだよ？ ウインドサーフィン早くやりたいんだろ。

若い女 いいのよ。(と、さらにリラックス)

老人 ……風を待ってるのかい。それとも、彼氏を待ってるのかい。

若い女 ……両方。

老人 だろうね。今日は全く風がないし、彼氏も……。 (あたりを見まわして) おまえのじゃない彼氏は沢山いるけどね。

若い女 私の彼氏、知らないくせに。

老人 いやあ、知ってるよ。この間うちへ来たアメリカ人だろ。紹介はされなかったが顔は見たよ。

若い女 そう。

老人 いい男だね、頭もよさそうだ。

若い女 ありがとう。

老人 (笑って) やっぱり彼氏なんだ……。さて、(と、かまえて) ……蘆花、徳富健次郎が、この逗子海岸

岸に居をかまえたのは明治三十年。蘆花三十才の春であります。

若い女 さっきと全然つながってないけど、いいの？

老人 え……？

若い女 歌の話、してたわよおじいちゃん。

老人 ああ、とんだなすこし。

若い女 練習だからとびとびでもいいけど。

老人 いや、そうはいかんよ。……皆さん。皆さんに今うたっていたいた歌は、実は悲しみの歌、死者をいたむ歌、挽歌であります。……明治四十三年一月二十三日午後、鎌倉と江の島の中間の七里が浜沖で逗子開成中学校所有のボートが沈没し、乗組の少年十二名が全員溺死しました。……ミツコ。この間の日航の事故は死者が何人出たっけね。

若い女 この間って。

老人 ほら。機内の隔壁がやぶけて、尾翼が吹っとんだ。

若い女 あれはもうずっと前の。

老人 この間だよ。そうそう、五二〇人だ。五二〇人死んだ。ヘリコプターの能力に限りがあるとか何とか云ってないで、墜落地点をその日のうちに発見していれば、何十人かのいのちは助かったんだよ。今日の本の軍隊は自衛隊だけじゃあない。日本にいるアメリカ軍も日本の軍隊なんだから、ああいうときはアメリカのヘリコプター部隊にも出動してもらわなきゃいけんのだよ。それが道理というもんだろ。

若い女 ああ……。おじいちゃんはそういう考え方するわけ。

老人 ああ。そうだよ。

若い女 なるほどねえ。

老人 さて、溺死した十二名の遺体は、四日後の二十七日夕刻までに全部発見されたのでありますが、この完璧なる遺体捜査は、地元警察署員二十数名、漁民二百数十名のほかに、横須賀軍港から駆逐艦「吹雪」

「霧」の二隻、清水港から横須賀へ帰投中の水雷艇「かもめ」「おとり」の二隻が加わり、この四隻は、腰越小動ヶ崎と小坪の大崎、江の島と葉山長者ヶ崎、大磯照ヶ崎と三崎城ヶ島との間を結ぶ線にて三段階に区分したる相模湾東部海面の各受持区域内を、各艦各艇毎にジグザグ航進を継続しながら、浮

揚遺体の発見及び湾外への流出防止のための哨海活動を、日の出より日没にいたるまで連日実施、遂に二十七日、全員の遺体と、海底におかたて逆立していたボートとを発見するに至ったのであります。箱根号という名称を持つこのボートは、かつては日本海軍聯合艦隊旗艦松島に積載され、その後逗子開成中に払い下げられたものでありますが、実に不思議なる因縁を持つボートでありました。

若い女（老人の偏執的な調子が心配になってくる）……おじいちゃん、もうやめて。

老人 まだまだ。（若い女に語りかけて）十二少年の、哀れな最期を遂げた十二少年の合同慰霊祭が、二月六日、盛大にとり行われた。私も……、当時小学三年級に在籍していた私も、小学生代表の一人として出席していた。

若い女 ……おじいちゃんも？

老人 ああ。今でも昨日のことに眼に浮かぶよ。会場は、披露山^{ひろう}を背景にした逗子開成中校庭だった。横須賀鎮守府長官海軍中将瓜生外吉、逗子開成中附近に別荘を持つ海軍大将東郷平八郎、小説『不如帰』の作者徳富健次郎が弔辞を読み上げ、つづいて、黒紋付黒袴姿の鎌倉女学校生徒七十余名がすすみ出て、オルガンの演奏と共に、真白き富士の嶺、緑の江の島と、七里が浜哀歌を合唱しはじめた。

マーラーのシンフォニー第四番、第三楽章が流れはじめる。

老人 その歌に、五千名を越える会葬者のすべてが、胸をかきむしられ、やがてすすり泣きの声が海鳴りのようにたかまって、歌声を圧した。……そのなかに、蘆花徳富健次郎がいた。余人のあづかり知らぬ悲しみに打たれ、おのれ自らを責めさいなんでいた……。そう。蘆花先生は、知っていたんだ。軍艦松島にあ

ったボートがなに故逗子の海より出でて七里が浜沖に沈まねばならなかったかを、知っていたんだよ。

(若い女の方にせまりながら) “不如帰”のヒロイン浪子は、海軍少尉川島武男と相思相愛の婚姻を遂げながら、肺結核の発病により離縁され、この逗子にて療養の甲斐もなく、もう……、もう女なんぞに、生れはしませんよと、恨みの一語をのこして世を去った。

若い女 …… (じりじりとしりぞく)

老人 (なおもせまって) 浪子は、実在の女性だった。そして浪子には、高という弟がいた。高は薄命の姉と川島海軍少尉のおもかげを追うかのように海軍兵学校に入学し、海兵三十五期士官候補生として軍艦松島に乗り組み、遠洋航海に出発した。軍艦松島……。そう、十二少年を沈めたボート箱根号は、この時はまだ松島の艦上にあった……。そして松島は、なんと、遠洋航海の帰路台湾の港にて原因不明の弾薬庫爆発事故を起し、沈没!

若い女 (通行人の不審そうな眼を気にして) なんでもないんです、練習なんです……。

老人 松島は、あつという間に沈んだ。犠牲者二百名が出た。数日後には横須賀に帰港して海軍少尉に任命され、天皇陛下に拝謁する栄を控えていた士官候補生三十三名が、海底の藻屑と消えた。浪子の弟、高も、死んだ……。

若い女 …… (かすかに) おじいちゃん。

老人 (若い女から離れながら) しかも、この時沈没した松島には、かつては浪子の夫、川島少尉も(講演調に戻ってゆく)砲術士官として乗り組んでいたのです。……わたくし、徳富蘆花は、この運命の糸を察知したとき、自分の脊髄に慄然として走るものを感じました。浪子の夫を海軍将校としたのはわたしであります。わたしの創作であります。しかし、実在の浪子の弟、高は、川島少尉を追って軍艦松島に

乗り組み非業の最期を遂げた。そしてその霊は松島の遺品たるボート箱根号に乗りうつり、逗子海岸にさまよう浪子の霊と一体となって十二名の少年を海底にひきいれたのであります。嗚呼、前途洋々たる十二少年の生命を奪取したるは神にあらざしてこのわたくし徳富健次郎であります。

マーラーの第四番、第三楽章の展開部が流れはじめ。

老人 わたくしは、この歌の、この挽歌の秘密を知っている。この調べはもう挽歌というものではない、祝い歌だ、よろこびの歌だ、そう、小説家、徳富のかなでる勝利の歌ではないのか。……ああ、いやだいやだ、もう、もうつくりごとなんぞには組しまい、小説なんぞは書くまい。おれのこれからの仕事は唯自身を語ることのみ、ありのままの自分を懺悔するのみ……（興奮の極、崩れる。）

若い女 おじいちゃん！

選挙運動のスピーカーの音が近づく。

両派の音が交錯し、マーラーの曲もたかまる。

若い女 おじいちゃん、しっかりして。

「市民の皆さん、私たちの街を、この逗子市を限りない混乱におとしいれてはなりません……

」……

「市民の皆さん、池子の森はこの関東地方にはもう、三つと残っていない原生自然林です。その貴重な緑を破壊しようとする計画をやめさせましょう……」

「市民の皆さん。日本は今、国家的安全保障をアメリカとの協力の上に築いています。」

「在日米軍は日本人を守るために駐留しているわけではありません。」

「我々自身の安全と幸福を守るために、日本の国土を守るために、どうか皆さん……。」

老人 (すつくと立って) 市民の皆さん！ 池子の弾薬庫は軍艦松島の弾薬庫でありますぞ。もう……二度ともう……。 (へたへたと坐りこむ)

スピーカーの声遠のき、老女と若い男がやってくる。

老女 ……あなた。

若い女 あ、おばあちゃん。マメル。

老女 あなた。どうなさったんですか。

若い女 おかしいのよおじいちゃん。夢中になって十二少年の話をして、あげくの果てにわたくし徳富健次郎だとか……。

老女 そう……。おじいちゃんはね、もう五十年も徳富先生のことを研究しているのよ。

若い女 だからって。

老女 あなた。レクチャーの練習、済んだんですか。

老人 ……愛子か。

老女 (若い男と若い女に) 蘆花先生の奥さん、愛子っていうの。

老人 (貝をひろって) ごらん。かわいらしい貝だ。

老女 ……まあ。なんてかわいいんでしょう。

老人 何という貝だろう。

老女 波の子、ナミコ貝っていうそうですよ。

老人 波の子、ナミコか。女の子の名前にいいね、女の子が生まれたら、ナミコってつけよう。

老女 ええ。

若い男 そんな、調子合わせて。おじいちゃんを甘やかしちゃだめだよおばあちゃん。

老女 おだまり。……私は、おじいちゃんを甘やかしてるわけじゃありません。あなた方にもいずれわかる

時がくるわよ。……あなた。うちへ帰りましょう。

老人 (低く) 老いたる者をして、

老女 え……？

老人 老いたる者をして、静謐のうちにあらしめよ。

老女 そうですね。早く選挙さわぎが終るといいですね。

若い男 セイヒツ？

老女 静かで、おだやかなこと。

若い女 おじいちゃん静かでもおだやかでもなかったわ！

老女 だから、静謐のうちについて、

老人 (しっかりした声で) 老いたる者をして、静謐のうちにあらしめよ。そは彼等こころゆくまで悔いんためなり。

老女 ……吾は、悔いんことを欲す。こころゆくまで悔ゆるはまことに魂たまを休むればなり。

老人 ああ、はてしもなく涙かんことこそ望ましけれ。

老女 ……吾等怯懦のために長き間、

老人 いても長き間、

老女 徒あたなることにかからいて、

老人

老女 } (声をそろえて) 泣くことを忘れたりしよ、げに、忘れたりしよ……。

一瞬の空白。

そこへ、アメリカ人の声が。

アンドレの声 ミツコ!

若い女 (われにかえって振り向く) ……アンドレ! (手を振り、駈け去る) アンドレ……。

老人 彼氏がやってきた。風もすこし、吹いてきた。

老女 ええ……。

マーラーのシンフォニー第四番、終結部、(インデックスNo.5)の鈴の音が鳴りひびく。

老人と老女、退場し、若い男、そのままそこへ坐りこむ。
装置は家の中になってゆき、丸太のスツールに坐ってマラーに聴きいる中年の男が浮かぶ。
音楽カットと同時に、暗転。

4

老人がソファに坐り、その近くの床に老女が坐り、隅にかたづけられた丸太のスツールに若い男が坐り、中央の和卓をかこんで、若い女、中年の男、中年の女が坐っている。

中年の男 (沈んでいる) ……やっぱり、そうだったのか。 ……あの男とね。

中年の女 (キッチンの方へ立ち、すぐに戻りながら) そんなに、気落ちしないで、あなた。

中年の男 おまえは、賛成なのか。アメリカ人が池子に住むことに絶対的に反対しながら、自分の娘がこう

も簡単にアメリカ人と結婚するって云い出したことには全く無抵抗なのかい。

中年の女 全然べつのことじゃないの。

中年の男 べつじゃない。

中年の女 だいいち、池子に住むのは唯のアメリカ人じゃないわ、軍人よ。それに唯住むんじゃないわ。あの土地が永久的に治外法権の場所になるのよ。変な云いがかりはよして。

中年の男 べつの問題だとしても、ひっかかりはあるよ。きみが気持の上で全然ひっかかってないとしたらおかしいよ。

中年の女 あなたって池子問題には全然無関心でいながら、ミツコがアメリカ人のひとと結婚したいって云い出した途端にそんな論法をとるなんて、それこそおかしいわよ。

中年の男 おれは池子問題に無関心だってわけじゃない。

中年の女 あら、そうなの。じゃ、はっきり云って。住宅受入れ派なのね。ミツコの結婚相手としての個人としてのアメリカ人は受入れないけど、軍隊としての権力としてのアメリカ人は無条件に受入れるってわけね。

中年の男 おまえこそ変な風にふたつを結びつけてるじゃないか。おれは、国際結婚っていうものは慎重に、慎重の上にも慎重に考えてからきめるべきだって、そう云ってるだけだよ。

若い女 そう。じゃあ、頭っから反対ってわけではないのねお父さん。

中年の男 いや、……おまえ個人の気持を離れて、おれだけの気持としては……、はっきりいって、反対……、そう、反対だねやはり。

若い女 はっきりしないのねえ。

中年の男 なんだその云い方は。年頃の娘を持った父親の気持、わかってるだろ。おれもその、ごくありふれた父親の一人として今、シヨックを受けているわけだよ。

若い女 ごめんなさい。それはわかるわ。

中年の男 とにかく……、おまえはだいたい、結論を出すのが早すぎるよ。お互い短時日のうちに親しくな
ったとしても、結婚っていうことはもうすこし、

若い女 アンドレとは知り合ってから一年たってるって本当のことを云ったわよ、あたし。

中年の男 初めて会ったのが一年前ってだけで、ちゃんとつき合い出したのはごく最近だってさっき云った
じゃないか。

若い女 そりゃ私だってもうすこしひとりでいたいけど、アンドリウが云うの。一日でも早くちゃんと結婚
しようって。

中年の男 アンドリウって云ったりアンドレって云ったり、どっちかに決めろよ。男が二人いるみたいでや
だよ。

若い女 わかった。正しいのはアンドリウだから、アンドリウに統一するわ。

中年の女 アンドレのほうがあのひとらしくて私は好きだけど。

中年の男 へえ、変わったのかい。アンドリウ・ジャクソンはインディアン殺しだからもうペケかい。

老人 はっはっは。ペケとはおまえ、古い言葉を使うね。なつかしいね。トルストイもペケ、パウロもペケ
ッて、蘆花先生は日記にやたらと書いてるよ。あいつもペケ。こいつもペケ。

老女 あなた。

老人 アンドリウもペケ。アンドレもペケ。唯の彼氏でいいじゃないか。彼氏で。

中年の男 そうはいきませんよ。結婚したいって云ってるんだから。

老人 そうか。結婚したいって云ってるのか。じゃあ私の意見を云おうか。

老女 あなた。ミツコはノブオとケイコさんの娘なんですから、私たちの意見はあとで……。ね。

老人 そう。ミツコはノブオとケイコさんの娘だ。……私たちにはとうとう子供ができなかったね。淋しいね。

老女 しっかりして下さいよあなた。蘆花先生ご夫婦には子供がおできにならなかったけど、私たちにはノブオが、

老人 わかってるよ。冗談だよ。

老女 そんな冗談、云うもんじゃありません。ノブオが傷つくじゃありませんか。

老人 わかった。

中年の女 (笑って) ……あなた、傷ついた？

中年の男 ……おまえがそういう風に余裕たっぷりなのは……。ミツコ、お母さんにはもう根回しがすんでるのか。籠絡したのかお母さんのことは。

若い女 そんなことしてないわよ。ひとりひとりに云うのは面倒だからみんなに集まってもらったんじゃないの。お母さんだって今日がはじめてよ結婚のことは。

中年の男 ひとりひとりに云うのは面倒だとはなんだい。え？ おまえの一生の問題だぞ。考えなけりやいけないことが山ほどあるんだぞ。……彼と結婚して子供が生まれれば、その子供は当然混血児だ。いくらインターナショナルな世の中になったといっても、日本というのは特別なところがあるから、混血児を一人前に育てるにはそれ相応の覚悟がいるよ。いい大学にうまく入れたとしても一流企業への就職はまず無理だ。そういうこと、考えたのかい。

若い女 子供が生まれる前から、結婚する前から子供の就職のことを考えるなんて、そんなのあたし、いやよ！

中年の男 いやだって云ったっておまえ。

若い女 私はアンドリウと結婚してアメリカで暮らすの。

中年の男 なんだって？

若い女 もちろん、アメリカで暮らしたいから彼をえらんだってわけじゃないわよ。でも彼と知り合ったのはひとつの縁ってものでしょ。その縁を生かしてアメリカ移住っていうあたしの夢を実現したいと思ったわけ。これでもうぶん考えたのよ私。

中年の男 ……アメリカ移住。いつの間におまえ、そんなこと、

若い女 ……アンドリウと愛し合ったときに、ひらめいたの。このひとと一緒にアメリカへ行こうって。

中年の男 ……愛し合ったとき、というのは、むこう流の云い方だな。つまり、一緒に寝たときっていう、わけか。

若い女 ええ。そう。

中年の男 ……（怒りの言葉が見つからず、照れたようにもじもじする）

老女 愛し合ったときに、そう感じた。……わかるよミツコ。女っていうのは、翔ぶことができるのよ。自分ってものに動物的に自信があるから、どこへでも行ける。……でも、若いうちね。私はもうだめ。

老人 あたりまえだ。はっはっは。

老女 たんとお笑いなさい。あなたのお守りをしているからよ私が動けないのは。

老人 おれのお守りね。愛子夫人もいつもそう云ってたよ。それで蘆花先生は日記に書く。愛子はペケ、愛子はペケ。……でも、愛子はかわいい。

中年の男 お父さん、すこしだまって下さいよ。

老人 わかった。しかし、意見は云っておく。云ってから、寝る。……いや、私が意見を云ったとてききやしないなミツコは。(立ち上がって) やめとく。……おやすみ。(上手へ)

若い女 おじいちゃん。

老人 うむ？

若い女 意見を云って。おねがい。

老人 わかった。……問題は、しあわせになることだ。……男と女の、確固とした結びつき、それさえあればいい。自分たち夫婦が、世界でひと組しきやいないアダムとイヴだという自覚さえあれば、それでいい。人間の生活は、一人の男と一人の女の結びつきをはじめとし、終りとする。お互い何国人と何国人であらうと、どこの国に住もうとかまわん。確固とした男と女の結びつき、それさえあればいい。以上だ。

若い女 ……ありがとう。

老人 じゃ。おやすみ。

中年の女 おやすみなさい。

老人、退場。

中年の男 ……真面目に話をしなくちゃあいけない。……(中年の女に) おやじ、この頃ますますおかしいね。(若い女に) 海岸で演説の練習をしてたって？

若い女 演説っていうのとはちがうけど。

老女 おじいちゃんのこととは私にまかせてちょうだい。心配はいらないわ。

中年の男 (突然振りむいて) マモル。……おまえの意見はどうなんだ。

若い男 おじいちゃんのこと？

中年の男 そうじゃないよ。ミツコのこと。

若い男 おれ……べつに意見なんかないって、自分で今思ってたけど、おじいちゃんが今云ったこと、意外と自分に近い考え方じゃないかなって……

中年の男 考え方でもなんでもないよあれは、一般的抽象的、要するになんにも云わなかったのとおんなじだよ。

若い男 そうかなあ。

中年の男 アダムとイヴだなんて馬鹿げてるじゃないの。

若い男 でも、そこが意外と具体的で、

若い女 そうなのよ。ちよっとどきっとしたけど、意外と新鮮なイメージなのよね、アダムとイヴって。

若い男 (中年の女に) アダムとイヴって、何国人なの。

中年の女 さあ……旧約聖書にあるわけだから、ユダヤ人かしらねえ。でも、もともとアダムって言葉は人間っていう普通名詞だったそうよ。

若い男 じゃ、イヴは？ 女っていう普通名詞？

中年の女 さあ。イヴはアダムの肋骨からつくられたっていうけど。

若い女 アンドリウに云わせると最近はどうじゃなくてアダムのほうがイヴの肋骨からつくられたっていう説があるんですって。つまり女のほうが最初ってわけよ。

若い男 おれの感じではどっちが最初ってことはないんだと思うな。つまりアダムとイヴっていうのはお互

い男おんなであり女おとこであるわけ。そんなときそんなときの気分でどっちもどっちにもなれる、っていうのがいいんだなあ。

中年の男 いい加減にしろ。おじいちゃんはまだ寝たんだ。気をつかってやらなくてもいいんだよ。

中年の女 いつもは、はっきりした意見をなんにも云わないのに、ミツコのことはずいぶん夢中ね。一家の主人らしくていいけど。

中年の男 心配じゃないのかおまえは。アンドリウ・ジャクソンって男をそんなに信用してるのかいきみは。

中年の女 アンドリウとアンドレじゃないけど、あなた私のことをきみって云ったりおまえって云ったり…、むかしからあたし、それが気になって…。

中年の男 なんだい今さら。今さらそれを統一してくれていうのかい。おれはべつに、魂胆があつてつかい分けてるわけじゃないぜ。

中年の女 魂胆があるんだつたらこっちも受けやすいのよ。根拠なく使い分けるから落着かないの。

中年の男 おれのせいじゃない、日本語が悪いんだ。おまえ、きみ、あんた、あなた、貴様、てめえ、あなたさま、そちらさま、おたく、おぬし。

若い男 全く、英語だったらユーひとつきりだもんね。

若い女 でもアンドリウは、日本語のようにいろんな云い方があるほうが正しいって云ってたわよ。抽象的なユーなんて唯の言葉だけで、本当は人間みんなちがう関係におかれてるから、きみとかおまえとかあなたとかいっぱいある日本語のほうがすばらしいって。

中年の女 へえ。するとアンドリウって、ポストモダン、いえ、ウルトラモダン派ってことかしら。

中年の男 (若い女に) おまえがおじいちゃんの意見なんかきくもんだから、すっかりおかしくなっちゃった！今日はもういい、とにかくもう少し考えなさい。それがおれの希望だ。

老女 ……ノブオ。……勇気を出して、許しておあげなさい。信じるのよ、こどもを。

中年の男 ……そりゃ、信じるのはたやすいけど……世の中、何かを信じて、それでうまくいきますか？

……私は、経営者じゃないけど、身心をすりへらして車をアメリカに売るために頑張ってる。それで、この家庭を支えてる、……日本の車が海外で売れるのは、日本の車はいいって外人が信じているわけでもなければ、われわれがそう信じてるわけでもない、クオリティをあげ、コストを下げる……その競争に打勝つための努力を、血の出るような努力をしているからこそですよ、ミスは許されない、計算をしつくし先を読みつくして、その時その時の結論を出し、ひとつの決断をする。そのプロセスをその努力を、私はミツコに要求してるんだ。唯の結婚じゃないんだから、国際結婚なんだから、国際的、社会的、民族的、人間的、人種的、あらゆる現実上の問題が立ちふさがってる……。それをあらかじめ考えることなしに、唯娘を信じるというかたちで責任を放棄してしまうことは、私にはできないんです。

老女 久しぶりだねえ、あんたのそういう、しっかりしたものの云い方。会社では毎日そういう風なの？

中年の女 ……(低く笑いをもらす)

中年の男 なにがおかしい。……お母さん、お母さんももう寝て下さいよ。

老女 はいはい、じゃあ、寝ましょうかね。

若い女 おばあちゃん。

老女 なあに。

若い女 おばあちゃんもおじいちゃんと同じように賛成してくれるのね、私の結婚に。

老女 ……おじいちゃんはああ云ったけど、ひとりごとだねえ、あれは。あんたのことを考えて云ったんじゃないと思うよ。

若い女 ひねくれてるのね、おばあちゃんって。

老女 ふふふ……ひねくれてはいませんよ、ひとよりすこし、醒めてるだけよ。

若い女 ほんと、頼りにしてます。

老女 ふふふ。じゃ、おやすみ。(上手へ)

中年の女 おかあさん。

老女 ……

中年の女 ……

老女 ……あのこと？ ミツコが重大発表をしたんで、あなた、ノブオに云うひまがなかったんでしょけど、かまわないよ、云っても。

中年の男 ……なんだい。

中年の女 ……おかあさん、池子の、もと赤沢家の土地だったところへ、

中年の男 え……？

若い男 お母さんに話したの、おばあちゃん。

老女 いいえ、お母さんとそのお友達に今日みつかってしまったのよ、あたし。

若い男 それでか。なんだか、おばあちゃんの様子がおかしいと思ってたよ。(のけぞって) ああ、あ、つ

まんねえ、これでひとつまた秘密がなくなっちゃった……。

中年の男 なんだい、秘密って。池子の土地がどうしたって？

中年の女 おかあさん。あそこへはもう、ほんとは行かないで下さい。私たちももう足をふみ入れませんか。ら。(中年の男に)あなたからも……。おかあさん、池子の森の、もと赤沢家の土地だったところへ、月に一度行ってらしたんです。……。私、初めて今日、

中年の男 ……なんで、そんな。……やめて下さいよ、接收地に入るなんてあぶないじゃないですか。……ひとより醒めてるなんて云ってそんなことしてるんじや、おやじといい勝負だ。……ほんとにもう、やめて下さいね。

老女 ……約束はできないわ。

中年の男 お母さん、約束して下さい。

老女 私に命令なんかしないで。約束はできません！

老人がいきなり出てくる。

老人 聞いたぞ、池子の森へ行ってたのかおまえは。

老女 ……あなた。

老人 誰に会いに行ってたんだ。池子の森へ月に一度、いったい誰に会いに行ってたんだ。

若い女 おじいちゃん。

老人 白状しろ、誰とあいびきしてた。

老女 あいびきですって？ 馬鹿らしい。

老人 愛子！

老女 私は愛子じゃありません！

中年の女 ……（中年の男に）あなた。

老人 わかったぞ。俳句の会だな。俳句の会っていうのもおまえはいそいそしてた。俳句とは真赤ないつわり、池子の森へ男と会いに行つてたんだな。さあ、白状しろ。

中年の男 お父さん！（老人をおさえる）

老人 知らないんだろおまえは。こいつはむかしから淫奔な女だったんだ。おまえだって誰の息子がわかりやしない。おれにちっとも似てないじゃないか。え？ おまえはおれの息子だって証拠があるのか。あるならみせてみる。みせてみる。（老女にまたせまって）おい！ 白状してしまえ！

老女 ああ、なさけない……。私、なさけない……。泣く

老人 泣いてごまかす気か。愛子！

中年の女 お父さん！

若い女 おじいちゃん、ほんもののボケ老人になったんだわ。ああいやだいやだ。（隅へうづくまる）

中年の女 おかあさん。むこうへ行きましょう。（老女をささえる）

老人 どこへ連れて行く。森へ行くのか。

老女 ……（じつと老人を見つめる）

老人 池子の森へ行くのか！ ……殺してやる！

中年の男 （必死におさえて）乱暴はやめなさい！

老人 かまうな。おまえは他人だ。どこの馬の骨ともわからん男だ。こいつは、誰とでも寝るんだ。

中年の男 お父さん！（叫びと共に老人をなぐりつける）

老女 ノブオ!

老人 (力がぐっと抜けて) おれを、なぐったな。

中年の男 ええ。

老人 ……おまえは誰だ。

中年の男 ノブオですよ。あんたの息子だ。

老人 ……そうか。ノブオか。(じっと何かを考える風だが、まだ普通ではない) そう……、ノブオだ。

老女 ……あなた。(近づく)

老人 ……(正面を向いたまま) たのむ。池子の森へはもう、行かないでくれ。(退場して行く)

中年の男 ……まさか、こんなにまで。……完全におやじ、

中年の女 ごめんなさい。おかあさんの池子のこと、云い出さなければよかった……。

中年の男 きっかけはいくらでも……。これから、くりかえすのかね、今のようなこと。

老女 ……あのひとは、私のことだけを考えてるのね。……だから、私が、お守りをしますよ。……大丈夫。

夫。

老人の声 (大声で) 老いたる者をして静謐のうちにあらしめよ、それは彼等こころゆくまで悔いんためなり。

老女 ほんとに、あなた。もうすこしなんですから、もうすこしでやすめるんですから、静かに、おだやか

にね……。 (嗚咽をこらえながら退場)

若い女 ……がっかりだわ。おじいちゃんのアダムとイヴって話、私にとって千人力だと思ったのに、がっ

かりだわ。おじいちゃんがあんなになってしまっは、私の結婚なんてもう冗談みたいなものね。

中年の女 ……アンドリウのこと、あなたにも不安はあるのね。

若い女 あるにきまつてる。なかったら馬鹿みたいじゃない。あたし、家族みんなに励ましてもらいたかったのに……。

中年の女 ……

若い女 これから、大変よお母さん。友達の家にはボケたおじいさんがひとりいるの。その友達の話、うそのように思ってたけど、ほんとだったんだわ。今のおじいちゃんにそっくり。いえ、もっとひどいの。おばあちゃんにめちやくちゃんにやきもちをやくだけじゃなくて……。ああ、口に出して云うのなんかいや。でも、云うわ。そのおじいさん、時々狂ったようになって、誰が見ても、昼日中でも、おばあさんを裸にして抱きしめようとするんですって。馬のりになって。どうして。どうしてなの。お父さんも八十すぎたらそうなるの。

中年の男 ミツコ……。

若い女 だったら早く死んで！ 長生きなんかしないで！（顔をおさえて、奥へ駆けこむ）

若い男 ……おれ、風呂にはいつてくる。先にはいつていいね。

中年の女 ええ。……あなた、おばあちゃんといつ頃から森へ行くようになったの。

若い男 ……

中年の男 おれにもお母さんにもなぜだまってたんだ。

若い男 おばあちゃんと、約束したからさ。秘密にするって。そのぐらいの約束、そのぐらいの秘密、あつたっていいだろ。

中年の女 あなたもう子供じゃないでしょう。何が面白くてそんな秘密を。

若い男 面白くなんかないさ！ でも、すこしは面白いさ。すこしはね！（と、退場）

中年の男 ……あいつ、今まで、親にどなったことなんかないのに。

中年の女 あの子も、今のおとうさんを見て動転しているのよ。

中年の男 ……ケイコ。

中年の女 ……。

中年の男 おれ、なんだか自信がなくなってきたよ。…ミツコのこと、池子のこと、おやじとおふくろのことも、さっぱり…。おふくろはなぜ池子の森へなんか…。…え？ なぜ危険を冒して接收地へ入ったりしてたんだろう。

中年の女 なつかしい場所だからですよ。失われてしまっただけに、余計。

中年の男 池子の土地は、あきらめなければいけないんだ。

中年の女 ……私は、あきらめないわ。

中年の男 なぜなんだ。きみにとってぎりぎりのところ、池子に米軍住宅が建っても困ることはない筈だ。

生活ってものをぎりぎりに考えたら大した問題じゃあない筈だよ。きみが反対運動に夢中なのは生活に余裕があるからじゃないのかい。おれには正直いってそういう余裕がない。そう、ないんだよ。年収何百万でも一千万でも、おれは車を売ることと頭がいっぱいだ。いっぱいにしていなければ脱落する。それこそ生活が成り立たなくなつて、きみに余裕をもたせることができなくなる。いっそそうやってみればわかるだろう。きみは、ノイローゼになつたおれを含めて、家族みんなを支えることに夢中になるだろうよ。その時は、池子問題なんてどこかへ吹っ飛ばしてしまつてにちがいないんだ。

中年の女 やめて。そういう云い方はやめて。

中年の男　じゃあ、反論してみろ。反対運動は余裕の産物じゃなくてギリギリの気持だって反論してみろ。いのちがけだっていう証拠をみせてみる。

中年の女　池子のゲートの前で私が焼身自殺でもすればその証拠になるとでもいうの。……私は、私たちは、人間として当然だと思う気持をそとにあらわしているだけよ。それをする人間が一人もいなくなったらどうなるの。

中年の男　そこまで心配することはないさ。本当にギリギリまで追いつめられれば誰だって刃むかうさ。

中年の女　そうは思えないわ。特に日本人はね。

中年の男　おまえこそ、そういう云い方はやめろ。高みからものを云うのはやめろ。

中年の女　御飯をたべられるうちは、その余裕があるうちは何にも文句を云うなっていうの。

中年の男　おまえは、おれのことをエリート・サラリーマンだと思ってるんだろね。その妻だと思って安心してるんだろね。おれもおまえのそういう顔を見て安心してさ。宣伝カーに乗って、スカーフをなびかせて、生き生きと声を上げているおまえを想像するのは楽しいよ。どうぞやってくれ。家族みんなにシェアせあれだ。……おれは、唯働くさ。おれにはそれしきやない。おまえたちが遊んでいる庭のほうへ、出て行く余裕がない。これっぽっちの余裕もないんだ。

中年の女　そう……。だったら革命を起せば。

中年の男　カクメイ？

中年の女　人間はお金だけじゃ生きられないものよ。余裕が必要だわ。それがゼロになっているんだったら革命を起すべきよ。

中年の男　カクメイ……。わかるか、おれはいま、片仮名で革命って云ったんだぜ。きみはちゃんとした漢

字のほうで云ったんだろうね。現代に生きてないよ……ふふふ。カクメイか。なつかしいね。池子の森じゃないが、月に一度ぐらいはおれも幻を求めてかえって行きたいもんだ。カクメイの森へね。……なんて顔してるんだ。それでも、おれ、六十年安保の時は、

中年の女 え？

中年の男 よそう。よそうそんな話は。

中年の女 あなた。……話して。本当なの？ 六十年のあの時、闘争に参加したの。全学連のメンバーだったの。

中年の男 ……ああ。

中年の女 一度もそんなこと、結婚する前もあと、今まで一度もあなた……。……千九百六十年、四月、五月、六月。はつきりおぼえているわ。あの頃の毎日……。

中年の男 (かすかに) きみも……。

中年の女 あの年の、一・一六から参加したの。

中年の男 羽田空港坐りこみ。岸首相渡米阻止の。

中年の女 そう。犠牲者が出たわ。私も腕と足をやられて二カ月は動けなかった。

中年の男 おれが初めて警官隊と衝突したのは四月十五日のデモだ。国会への。

中年の女 あの日からよ、安保阻止国民会議が全学連にケチをつけはじめたのは。

中年の男 四月二十六日。国会正門前でまた警官隊と衝突。

中年の女 労働者のデモが八万人。やっぱり心強かったわ。

中年の男 五月十九日、安保条約強行採決。

中年の女 それを聞いて私たち、議事堂へ入ろうとした。警官がびっしり取りまいて、

中年の男 どこからも入れなかった。

中年の女 それで、首相官邸へむかったの。門を突破したわ。

中年の男 五月二十三日。もう一度首相官邸。

中年の女 今度は鉄条網が。

中年の男 おれたちには武器がなかった。

中年の女 プラカードと石だけ。ポケットいっぱい石。

中年の男 五月二十六日。十五万人のデモ。

中年の女 六月四日、羽田空港。ハガティ大統領秘書阻止。そして、

中年の男

中年の女

中年の女 ……あの日、あなたは、

中年の男 夕方、五時頃、チャペルセンター前に集合して、おれのグループは国会正面へむかった。

中年の女 私は、南通用門へ。

中年の男 じゃあ、最初に突入したグループ……

中年の女 ええ、扉を破って構内へ入ったわ。夢中で前へ進んでいるうち、足ばらいをかけられて、倒れた

瞬間に髪かんばの毛をつかまれたわ。そしてひきずられて……殺されると思ったわ……。死ぬと思った。

中年の男 ……樺かんばさんが

中年の女 ……樺美智子さん、最初は私のすぐとなりになっていたの。学校はちがってたけど、毎日顔を合わせて

たわ。

中年の男 おれは、南通用門を突破したと聞いて、みんなと一緒にそっちへ走った。でもその時はもう、突入グループが警官隊に押し戻されて門の外へ出た。すっかり暗くなってた。雨が降り出した。そのうち、女子学生が一人死んだっていう知らせが伝わった。国会構内へ入ろう！ もう一度やろう！ ……おれたち、しっかりとかたまって、じりじり構内へ入った。とうとう、四千人の学生が国会構内へ集まった。誰かが演説してた。今だ、今がわれわれの時だ。前衛たる我々のすぐうしろに十万の大衆がいる。国会をかこんでいる、十万人のうしろに百万人がいる。今だ。突込むんだ！

中年の女 ……

中年の男 ……

中年の女 (言葉が冷えてゆく) 感じてわかったわ。あの日はチャンスだったのよ。……革命の。……六月十五日が、惜しい。

中年の男 ……殺されたのが、樺さんだとわかったのは、あくる日だった。

中年の女 あくる日も、雨が降ってた。

中年の男 (低くうたい出す)

わすれまい 六・一五

若ものの血の上に 雨は降る

ひとつの手は 砕かれた

すべての手を 組ませるため

中年の女 (夫と唱和する)

忘れまい ぬぐわれぬ血

われらすべての 夜明けまで

手に手をわたせ

さらに さらに かたく

二人がうたっている時、腰にタオルを巻きつけた若い男が、ヘアトニックを頭にそつと振りか
けながら顔を出す。

二人を見て、呆然と立ちつくす。

二人がうたい終わったとき、ヘアトニックのびんをとり落す。

二人、振り向く。

若い男 (へっぴり腰でびんを拾いながら) ……どうでもいいけど、今のうた、なに? ……ごめん。いい

よ、こたえなくても。……それぞれの、ほんとうのなつメロって、それぞれにとって非常な、秘密だもん

ね。……大事だよ。……どうも、おじゃましました。(消えいるように退場)

中年の女 ……馬鹿ねあたしたち。(行こうとする)

中年の男 きみこそ。

中年の女 ……

中年の男 なぜおれに話さなかった。

中年の女 ……あなたはなぜ私に話さなかったの。

中年の男 想像もしなかったからさ。あの六月、きみがぼくのすぐ先にいたなんて。

中年の女 私もそうよ。初めて会った時から今の今まで想像もしなかったわ。あの六月私のすぐとなりになりたひとだなんて……あなたが悪いのよ、云い出したのはあなたよ。もう二十五年も前のこと……。私、恥ずかしい。

中年の男 恥ずかしい？

中年の女 ええ、……あなたも？

中年の男 なんて恥ずかしいんだ。なんで恥ずかしがらなくちゃならないんだ。あの六月のことを！（アンプに走る）

中年の女 あなた。夜もうおそいのよ。音を出さないで。……あなた。

マーラーの第五番、第一楽章、冒頭。トランペットの響き。

中年の男 十二時。十二時におかかって……。 （ボリウムを上げていく）

たかまるのは、葬送進行曲。

オーケストラの爆発と共に若い女がとんでくる。中年の女、じっと動かない。

若い女 （一瞬、立ちすくむが）……お父さん！ 近所から苦情がくるわよ！（アンプに近づく）

中年の男 さわるな！ 十二時を越えるんだ。おれの、カクメイだ！（リモコンでさらに音量を上げる）

老人と老女がやってくる。浴衣の寝巻。

老女 どうしたのケイコさん。……ノブオ！

老人 (老女に) ノブオ、どうしたんだい。

老女 え？

老人 (老女の耳もとへ) ノブオ、どうしたのかね！

老女 (何かとききまちがえて) まさか、そんな。

老人 え？

老女 まさかそんな！

若い男がやってくる。真直ぐ電源に走り、コードを引き抜く、突然の静寂。

若い男 お父さん。しっかりしてくれよ！

中年の男 ……しっかりしてるさ。しっかりしないでどうする。(アンプのポリウムを下げ、コードを電源に)

中年の女 あなた。

中年の男 わかってる。音を、宵の口に戻す。

再びシンフォニー、かすかに流れ出す。
第一楽章の終結部である。

中年の男
八時前、一家団欒の時だ……。

シンフォニー、適度な音にたかまる。

六人家族、それぞれの姿勢で聴きいる。

老人と老女、腰をおろし、相似形の側面を見せ、背筋を伸ばして坐る。

若い男、立去ろうとするが、家族の方を振り向き、ゆっくりと戻ってきて坐りこむ。
幕がおりてくる。

第一楽章が終る。

5

マーラーの第五番、第五楽章の終結部が鳴って、幕があく。

六人家族、おなじ位置に坐っている。
シンフォニーが終る。
老人が最初に口をひらく。

老人 ……これで、終りかい。

中年の男 ええ。

若い男 じゃ。（と、強く云って立ち上がる）おやすみ。……（行きかけるが、立ちどまる）ほんとに、これでもう、終りにしてよお父さん。

中年の男 ……。

若い女 ……（老人を見る）

老女 おじいちゃんも大丈夫よもう。しっかりしています。

若い女 そうあってほしいわ。（と、立とうとすると）

老人 （叫ぶ）すまなかった、私が悪かった！

老女 ……あなた。

老人 ……アキコに今、自分の所行を聞いて慚愧に耐えなかった。信じられんことだが、まことに恥ずかしい。あやまる。

老女 ……（そっと立ち上がる）

老人 ……（老女を見つめる）

老女 なにか、羽織るものを。（退場）

老人 ……アキコは、池子の森へ通っていたその気持を、私に話してくれた。よくわかった。あの森は、アキコのほんとうのふるさとなんだね。私も、アキコの父親があ森を国にとられた時の残念無念を私に語ってくれたことを思い出したよ。しかし、冷酷なようだが、私はアキコにはつきり云ってやった。今後は絶対にあの森へ行ってはいかんと、そう云ってやった。もちろんそう云う根拠というのはあの森がアメリカ軍の接収地であり、接収地というより占領地であり、許可なく一歩でも入ったら射殺されても文句の云えない土地だからだ。私はアキコの夫として保護者として、アキコの行動を制限せざるを得なかった。以上だ。

中年の男 お母さん、納得したんですか。

老人 うん？

中年の男 もう行かないってお父さんに約束したんですか。

老人 ああ……。そういえばまだ、返事をきいていないね。途中でガンガン、音楽が鳴り出したもんだから。

老女、戻ってくる。自分も何か羽織っている。

老人 アキコ。……さっきの話だが、池子の森へはもう行かないって約束してくれるね。

老女 (羽織を着せながら) 約束はできません。

老人 なぜ。

老女 あなたには関係のないことでしょう。

老人 関係がない？

老女 私が尋ねて行くのはあなたに会うずっと前の自分ひとりだけの場所なんですから。

老人 おれはおまえのいのちを心配してるんだぞ。

老女 見つかったら射殺されるなんて、オーバーですよ。

老人 オーバーじゃない。甘いんだよおまえの考え方は。今まで見つからずにすんだのは運がよかったんだ。決してもう、

老女 いいえ、約束はできません私。

老人 アキコ！

若い女 おばあちゃん。そんなに頑固に云わなくても。一応約束して。そうしないとまたおじいちゃん、

老女 一応約束するなんてことはできません。約束するかしらないか、どっちかききや、

中年の男 お母さん。そりゃ、いきなり射殺されるなんてことはないでしょうけど、とにかく接收地に入るのは禁止されてるんですから。

老人 接收地なんかじゃあないって云ったろ。池子はアメリカの占領地なんだよ。踏みこむには覚悟がいる。いや、覚悟だけじゃ足りん。武装して、そう、戦闘の用意がいるんだ。おまえ、鉄砲を持ってるか。

戦車はあるか。あるまい。

老女 なにを云ってるんですか。

若い女 おじいちゃん、またおかしくなってきたわよお父さん。

中年の男 お母さん。おじいちゃんのこと引受けるって云ったでしょう。おやじを怒らせないでくださいよ。

老人 おれは怒っているんじゃない。説明してるだけだ。若い者ならいざ知らず、おまえは明治生まれの年寄りだろう。戦争に勝った国が負けた国を占領するという理屈がわからん筈はあるまい。

老女 私は、明治生まれじゃありません。

老人 うそをつけ。

老女 大正元年ですよ。大正元年八月一日。明治は二日前に終わってます。

老人 そりゃちがう。明治天皇が亡くなったのは七月三十日だが、乃木大将が自決したのは九月十三日だ。

九月十三日までは明治なんだよ。したがって八月一日生まれのおまえは明治生まれだ。

老女 そんなこと初耳です。聞いたことはありません。

老人 ……ま、おまえは女だからな。男のおれとは歴史についての考え方がすこしちがうのかも知れん。

老女 そう、ちがうんです。だから私は、池子の森へ出かけて行くんですよ。あの森のあの場所が占領地だ

ろうと接收地だろうと私の思い出の場所が変わりはないんですから。

老人 まだわからんのかおまえは。…アキコ。池子の森にどんな思い出があるうともだ。あそこはもう取

られちまつてるんだから、あきらめなくてはいけないんだよ。これはいわば、国家的問題なんだからね。

老女 国家的問題なんかじゃありません。わたくし事です。だから私は私なりに。

老人 わたくし事じゃあない！ いいか。日本国は、戦争をして、完全なる敗北を喫した。その結果、戦後

四十有余年を経たこんにちでも、戦勝国アメリカの占領地が日本国のいたるところに残っておる。沖縄、

佐世保、岩国、横須賀、横田、三沢。しかもアメリカは、そういうところを戦争に勝った記念として適当

にぶんどつてるわけじゃあない。今の、今のだよ、一時間かそくらで勝負のついちまう核戦争を想定して

の世界的作戦計画のために占拠している。そこに科学の最先端を行く施設を置き、防衛及び攻撃オペレー

シヨンを完全にカバーしている。……なぜか。きまつてる。日本列島は、ユーラシア大陸の東半分と西太平洋全域を制圧する上でもっとも重要な軍事拠点だからさ。だからアメリカは握って手放さない。……そりゃまあ、当りまえな話さ。アメリカは日本国に勝ったんだからね。いくら文明が進歩したって勝利者は敗者から何かをとるんだよ。それも大事なものをだ。文明が進歩した度合いに応じてそれなりに最も大事なものをとるし、とられる。……それだけじゃない。アメリカは日本列島を作戦上放棄しなければならぬ時は施設及び国土そのものが敵の手にわたるのを防ぐために列島を核攻撃する準備さえしているんだよ。その証拠にアメリカは日本全土の精密な重力分布図をつくっている。わかるかい。地球上の重力の値は、均一ではない。場所によってちがうから、ミサイルを発射する際には目標地域と発射地点の重力の差を正確にインプットしてやらなければいかんのだよ。……ま、そういう作戦計画は当然のことだ。これだけの重要指令部重要基地となった日本列島を、絶対にもう他の国にわたさないという決意をアメリカは固めているわけだからね。……わかったかい、アキコ。池子の森の一部がおまえにとってどんな大事なものでも、もはや取られてしまったものなんだから仕方ないじゃないか。池子は横須賀に附属している施設なんだからアメリカは絶対手放さない。手放す時は、つまり、そこへミサイルをぶちこむ時だ。……以上だ。

若い男 おじいちゃん、専門家だね。よくテレビに出てくる軍事評論家、なんていったかな、あのひとより詳しいくらいだ。

老人 べつに詳しくはない。アメリカ軍が日本列島への核攻撃のために重力分布図を、それも日々刻々新しいものをつくっているなんてことはテレビでは云わんだけさ。

若い男 じゃあ、軍事評論家の間では常識なの。

老人 まあ 常識だろうね。

若い男 よし。知ってるかどうか今度ためしてみよう。友達に、マニアがいるんだよ、ミサイルの。

老人 ミサイルのマニア。

若い男 そう。

老人 なんていうこった。……おまえたち戦後に生れた者は戦争を知らないのはしょうがない、知らなくてもいい。しかしだな、敗戦国に生れたんだということは知っておいたほうがいいぞ。ノブオもケイ子さんもそれだけは子供におしえといたほうがいいぞ。

中年の女 おとうさん ……おとうさんは、池子のことはすべて、敗戦の結果だからすべてあきらめなくてはいけないって、そうおっしゃるんですか。

老人 ……そう。…そうだよ。

中年の女 それではあまりにも、

老女 あなた、あなたが今、解説してくださいったことは私にもわかりますよ。

老人 うむ。

老女 わかりますけど、だからって私は、やっぱりあきらめらめる気持にはなりません。

老人 ……やっぱりおれの云ったことわかってないんだ。

中年の男 お父さん。お父さんは軍人でもなかったくせに、やっぱり国を、軍備とか戦争とかそういう面で

しか考えないんですね。

老人 そんなことはない。私は今、池子に関連することを云っただけだよ。

中年の男 日本は今でも敗戦国だ。それを子供に教育しろって云ったじゃないですか。

老人 ああ、云ったよ。日本はもう経済面ではアメリカに勝ってる。技術も上だなんてふわふわよる連中は若いもんより中年に多いようだから、教育しなくちゃいかんのはマモルやミツコの親たち、つまりおまえやケイ子さんたちかも知れんな。

中年の男 日本は太平洋戦争に負けたことは事実だけでも、負けたことをバネにして懸命に生きてきたんじゃないですか。戦争を放棄して。

老人 戦争を放棄させられてと云ってもらいたいね。……憲法第九条。あの条文をおまえ本気で考えたことあるかい。本気でといってもべつに深刻に真剣について意味じゃない、ほんの常識でだ。常識でちゃんと読んでみたことあるかい。おまえは大学をそれも法学部をちゃんと出てるんだからわかるだろう。国際法上、戦争は国家の当然の権利だ。だから、どこの国の憲法にだってわが国は戦争をする権利があるなんてことは書いてないよ。書く必要がないからだ。その反対に、もしわが国は戦争をいたしません戦力は一切持ちませんなんて書いてあったら、それはもう、わが国は今のところ独立国ではございません、この憲法は敗戦による当座のもので、どうかその点をよろしくご諒承下さいと云っていると解するほかないんだよ、そう思わないかい。

中年の男 しかし、日本の新憲法は、世界にさきがけて、人間の理想をかかげたものでしょう。第九条は、押しつけられたわけではなくて、当時の日本の首相が自らその理想を……

老人 幣原喜重郎かい。幣原首相はね、アメリカ軍司令官にして当時の日本の王様たるマッカーサー元帥から憲法メモをわたされて、戦争放棄は私のほうから申し出たことにしようと思われて側近に語ったそうだよ。マッカーサーは、有無を云わせずに戦争放棄の条文を押しつけた。彼にしてみれば、日本軍に追われてコレヒドール島からオーストラリアに逃げたとき、アイ・シャル・リターンと宣言して、復讐を誓っ

た時の気持の最終的な帰結なんだ。新憲法に、武力は一切持ちません戦争は絶対にいたしませんということんでもない条文を明記させて、彼は日本国というものを徹底的に侮辱した。侮辱しただけじゃない、日本国というものを国際的に無意味な存在と化すことに成功したんだ。考えてごらん、外国に対して絶対的平和主義無抵抗主義を打ち出すのはいい。しかしその場合は、そう宣言しても国家は存在できるといいう理屈をちゃんと通すべきなんだ。ところがマッカーサーは、わざとそんな手続きはとばしちまった。しかも彼は日本通だから、天皇制さえ残しておけば日本が主権をとり戻しても憲法はそのままにしておくで見抜いていたんだらうね。実際、その通りになったじゃないか。外国は表立っては云わないが、腹ん中では、日本という国は本当の独立国じゃあないと思ってるよ。そう思ってるに相違ないんだ。

中年の女　じゃあ、おとうさんは、憲法第九条を削除すれば、日本が本当の国家になるというんですか。自衛隊をちゃんと陸海空軍と呼べばいいっていうんですか。

老人　そう。形式はそれだとこのう。マッカーサーが生きていたら、日本もやっと大人になったと云うだらう。

中年の男　そんな……

中年の女　ちよっと待って。そりゃ、国が戦争をする権利を放棄するということは、二十世紀の前半までの世界ではおかしいことだったかも知れません。でも核兵器時代の今は戦争そのものが不可能になってるんですから。

老人　戦争が不可能なら戦争をしない条文なんてよけい必要ないじゃないか。

中年の女　あってもいいじゃありませんか。一切戦力を持たないという理想をかかげて悪いという法はありません。

老人 そう。今の日本人があらためてそういう条文を自分でかかげることは、悪いことじゃないと思うよ。だがその前に、今の条文がマッカーサーの勝利のしるしだということを認める必要がある。理想をかかげるのはそのあと。

中年の男 われわれはねお父さん。憲法第九条を逆手にとって最低の軍事費というメリットを武器に経済を復興させてきた。マッカーサーはむしろ先が読めなかったんじゃないですか。アメリカがこれほど日本に経済的に圧迫されることなんか考えてもみなかったんじゃないんですか。

老人 アメリカは日本に圧迫されてやしないよ。自分の国の経済政策の失敗を日本のせいにしてるだけだ。そう云って大衆をごまかしてるだけだよ。

中年の男 その通りですよ。だから日本の経済人は、アメリカの要求をぎりぎりのところでは撥ねつけて踏張ってるんです。アメリカやヨーロッパが、お父さんのいうように日本を内心軽蔑してるなんてことは絶対ない。むしろ軍備競争からいち早くおりてしまったことをうらやましがってますよ。

老人 ノブオ。おまえは私の云ったこと、全然わかってないね。ひとはパンのみにて生きるものにあらず。私はその話をしてるんだぜ。今の日本国は敗戦直後にアメリカから食糧を恵んでもらってやっと生きていた時代と本質的には全くおなじだ。

中年の男 そんなばかな。

老人 営々と努力して生活はゆたかになったよ。しかしアメリカというつかえ棒がはずれたことは一度もなかった。アメリカと全く縁を切ってガラス箱の外にとび出そうとしたことは一度も……。いや、昭和十五年の安保騒動の時はすこし考えた。あの時だけだ、日本が独立する意志を持ったのは。

中年の女 おとうさんもそう思うんですか。

老人 ああ。あの時安保条約を本当に破棄できたかどうかはわからんけども、一度はアメリカというつかえ棒を捨てて、世界のナマの空気をじかに吸ってみてもよかったんだ。

中年の女 私もそう思うんです。

老人 しかし、それをしていたら、今の日本はないよ？ 考えてごらん。裸になった日本はアメリカとソ連の間に立って国際的曲芸をやらなければならぬ。そんな天才的な政治家が日本の左翼から出てくることなど考えられんし、結局米ソ両方のお恵みを当てにするようになるだろう。だがそれでも、米ソいずれのつかえ棒も拒否して、やせ我慢の貧乏独立を一度はためしてみたほうがよかったかも知れん。イギリスやフランスが、アメリカと一線を画しているのはなぜだと思ふ。損を承知で独立を守ってるからだ。人間はパンのみにて生きるものにあらずということを知っているからだよ。イギリスには日本とおなじように米軍基地がある。しかしイギリスは、アメリカが承諾なしに勝手な軍事行動を起した場合は米軍基地を攻撃すると宣言してるんだぜ、日本の自衛隊にそんな気持があるか。たと言葉だけでもそう宣言する意地があるか。全くあるまい。

中年の男 ……お父さんは結局、軍事マニア、戦争マニアなんだ。勝つか負けるか、独立か従属か、そんなことばかり云ってる！ ……完全に独立しているアメリカの内情を知ってるんですか。心あるアメリカ人は、今アメリカは内側から崩壊しつつあると嘆いてるんですよ？ 早い話が、麻薬です。三年前の統計でも、コカインの吸飲者が二千二百万人もいるんですよ？ マリファナじゃない、コカインを吸っている人間が二千二百万も。麻薬の売人は小学校の校内にまで入って子供を狙ってるんです。小学校は売人から子供を守るための訓練を毎日のようにつづけてるんです。今の大統領はもちろん、カーターもフォードもニクソンも、麻薬対策を国内最重要のプロジェクトにして真剣にとり組んだ。しかしみんなどうにもならな

かった。なぜだと思いませんか。

老人 アメリカは、苦しんでいるのさ。おまえが今云ったのは、自由と独立が苦悩している姿だよ。日本はまだその苦悩にぶち当たっていないだけだ。……日本では、子供だけが苦しんでる。それと知らずに苦しんでる。小学生や中学生がわけのわからない自殺をする。毎日のように。何の犠牲とも知らずに、生と死の境い目を、ひよいと飛び越えて死んでゆく。境い目が見えないのは子供だからじゃない。子供たちは生まれたときからむこう側へ、すでに死んでいる国へ追いやられているからさ。手でさわれない、血も肉もないフィクションの国へだ……。

若い男 ……（かすかに）おじいちゃん。

若い女 （やはり、何かの衝撃をかくして）おじいちゃん……、大丈夫そうね。

中年の男 ……

若い女 ……じゃあ、おやすみなさい。

若い男 待てよ。

若い女 なによ。私に命令なんかしないで。

老人 ミツコ。……水割りでもつくってくれないか。

若い女 ……

老人 こうして一家中の顔が揃うのは珍しい。……飲もうじゃないか。え？ おまえもイケる口なんだろ。

若い女 わかったわ。（水割りの支度をする）

中年の女 おとうさん！

中年の男 お父さん！ ……お父さんはそういう以上、自分も敗戦国民の一人だと、敗戦国民以外のなにも

のでもない惨めな人間だと自覚してるんでしょね。

老人 ああ。自覚してる。

中年の男 だったらなぜ起ちあがらないんですか。たたかわないんですか。池子へ入ってはいけない理由を長々と講義したりせずに、なぜお母さんの身を守って池子の森へ突入する決心をしないんですか。

老女 ノブオ。

中年の男 ぼくだって何度かアメリカへ行ってむこうのエリートに接する度に思いますよ。腹ん中では日本人を見くだしてらるって。しかし、むこうの優越感には何の根拠もないんだ。自分はアメリカ人だ白人だ、東洋人なんかじゃない、日本の経済力などそのうちにまた振り伏せてみせる……、そういう声がきこえるんです。そういうパワーとわれわれはたたかってるんだ。そう。戦いを放棄したりなんかしてやしない、ずっとたたかってるんですよわれわれは。本当の経済人は日本はもう世界一だなんて自惚れてやしません。お父さんこそ今はガラス箱の中にいるんだ。……それはとやかくは云いません。もう老人なんだから……、だまって休んでればいいんだ……。

老人 ……たしかに、おれは老人だ。いつの間にかそうなってしまった。……おまえの云うことは正しいよ。おれは、アキコのために、愛する妻のために、たとい銃や戦車はなくともあいくち一振り握って池子の森へ突入すべきなんだ。

中年の男 ぼくが云うのは、本当に云いたいのはそんなことじゃない。

老人 いや、おまえの云ったことでそれだけが正しいんだ。おれはもう、たたかえない。レクチャーをするだけだ。いや、ひとりごとを云うだけだ。誰にも通じないひとりごとをね。

若い男 そう……でもないよおじいちゃん。……おれ、自分のことがすこしわかったような気がする。……

ずいぶんもうむかしのことだけど、要するに境い目が見えなかったんだ、もうすこしで、ひよいと飛び越えるところだった……。

中年の女 マモル。

若い男 今も見えないっていえば見えないけど、どっち側かに安定しちゃってるんだね、自殺しようなんてこともう考えないと思うよ。わからないけど。

中年の女 あんた……、死にたいなんて思ったこと、あるの？ 本当にあるの？ ……うそでしょ。お母さん、あんたから眼を離れたことなんか一度もないんだからわかるわよ。うそでしょ？ おじいちゃんに気をつかうのはいいけど、そんな嘘、云うもんじゃないわ。

若い男 どっちにしても今は安定してるんだからいいじゃないの。お父さんとおんなじ大学へ入るために頑張ってるんだから。それは嘘じゃないよ。三浪はしない、二浪で必ず第一志望を突破してみせるよ。

老女 あんた、本当に自殺を考えたことあるの？ かわいそうに。

若い女 おばあちゃん、嘘よそんなこと。

若い男 そうそう、うそうそ。ほんとでも嘘。そうなんだよな、本当でもうそなのよ。

若い女 いい加減にしなさいよマモル。

若い男 (グラスに氷をいっぱい入れながら) 云っとくけど、アンドリウは当分日本にいるんじゃないかな。アメリカじゃなくて池子の住宅へアンドリウとそのワイフのミッチちゃんが新婚夫婦として入る、なんてことも考えられるな。もっともおじいちゃんやお母さんに云わせるとその時池子はまさに日本ではなくてアメリカか。するとミッチちゃんはアメリカ移住もできるし、実家へも五分というしあわせな奥さんになれるわけだ。こりやめでたい。……

中年の女 マモル……。

若い女 あんた、何を云ってるのよ。アンドリウは、そりゃ職場は基地内にあるけどネイヴィにもアーミーにも関係ないわよ。池子にできるのはネイヴィの住宅よ。

若い男 そう、アンドリウは横須賀基地の学校の日本語の先生だって自分では云ってるよ。だけど彼が教室で教えてるところを見たわけじゃないだろ。彼、エレクトロニクスに、特にコンピューターにすごく詳しいんだ。もしかしたらコマンド・ケイヴがほんとのオフィスかも知れないとおれは思ってる。

若い女 コマンド・ケイヴ？ なによそれ。

若い男 司令部さ。アメリカ海軍第七艦隊の地上司令部。

老人 ほう。横須賀には在日アメリカ海軍司令部のほかにもうひとつ司令部があるんだね。

若い男 (指さして) さすが、のみこみが早いね。

老人 そしてコマンド・ケイヴという以上、それは洞窟内に、つまり核攻撃にも耐えられるようになってる司令部だ。

若い男 そうだって！ (若い女に) アンドリウに一度案内してもらったことがあるんだよ、おれ。ゲートを入って右手のスロープをどんどん行くと兵隊も立入禁止になってる岩山がある。そこに洞窟があるんだ。

通称コマンド・ケイヴ。横須賀基地の司令官もそこは管轄外。つまり、コマンド・ケイヴのほう为上なんだってアンドリウは威張ってたよ。

老人 第七艦隊のオペレーションエリアは、太平洋全域とインド洋、アフリカの希望峰にいたるまでのとてつもない広い海面だ。

若い男 その洞窟、本当に核ミサイルをぶちこまれても大丈夫なのかって聞いたら、大丈夫、しかし、横須

賀基地そのものは潰滅する、きみの住んでる逗子はもちろん、湘南全部がふっとぶって笑ってた。

老人 (気がついて) そうだ。……池子にはすでに日本海軍がつくった弾薬貯蔵用の洞窟が二十以上ある。それはそのまま核シエルターとして使える。それがあからこそ米軍は、報復核攻撃用にどうしても必要な人員を池子に住まわせることを思いついたんだ。そうだよマモル。池子は、そのコマンド・ケイヴの延長なんだ。

若い女 いい加減にしてよおじいちゃんもマモルも！……あんだ、いつアンドリウに基地の中なんか案内してもらったの。え、いつ。

若い男 今年に行かなかったけど、去年の十月……、知ってるだろ、十月十三日は毎年ネイヴィ・フレンドシップデーで基地内に日本人も入れるんだ。……空母ミッドウェイと原潜のインディアナポリスがきた。インディアナポリスはもうトマホークを積んでるかも知れないってアンドリウが云ってた。知ってる？ トマホーク。自前のジェットエンジンで海上なら十五メートル、陸地で五十メートルという超低空をレーダーをよけながら飛んで、三千キロ先の目標にたった三十メートルの誤差で命中する。一個七億円から十億円もするんだからもちろん核弾頭つきでなけりゃ勘定が合わない。

老人 おまえ、すごいねえ。

若い男 今のはさっき云ったミサイル・マニアの受け売り。

若い女 あんだ、アンドリウと今でもつき合ってるの。

若い男 いやあ、今はつき合っていないよ。……おれは彼が、もしかしたら、ネイヴィかも知れないって思っ
て、それを注意しようと思って……

若い女 じゃあ、私にはアンドリウ、嘘をついているっていうの。

若い男 ……

若い女 彼が本当にその司令部の人間だったら、あんたにぺらぺらしゃべる筈がないわよ、日本の軍事評論家にとくに知れてることだって自分ではしゃべりはしないわよ。

若い男 おれは唯、学校の先生とは見えないって、そう感じたただだよ。

若い女 基地を案内してもらったこと、なぜ今までだまっていたの。あんた、横浜のディスコで彼と知り合っ
て、そのあと二、三度会っただけだって云ったわね。彼を紹介してくれたときそう云ったわね。嘘だった
の。

若い男 なにもそう、しつこく……。アンドリウはこの間うちに来たときが、そう、ほとんど一年ぶりだ
よ。

若い女 ……久しぶりだったことはたしかかなようね。でも、アンドリウを見たとき、あんたって何だか変だ
ったわ。

若い男 変って、なにが。

若い女 ……なにか、あったんじゃないの。

若い男 なにがだよ……。いいよ、アンドリウが軍人かも知れないなんてことおれの妄想だよ。撤回する
よ。それでいいだろ。(と、行こうとする)

若い女 (さえぎって) 待ちなさいよ。……。私をちゃんと見て!

若い男 ……

若い女 ……私に、何が云いたいの。ちゃんと云って。

若い男 ……アンドリウと結婚すること、おれは反対だ。……。しないほうがいい。

若い女 なぜ？

若い男 ……軍人。それも秘密の指令部員っていう可能性があるから。

若い女 それだけ？ もしそうだとしても私はいいわよ、軍人でも。

若い男 そう。……じゃあ、勝手にするさ！

若い女 なにをあなたふるえてるの。どうしたのよ、私のこと、そんなに心配してくれるの。

若い男 ああ。心配してる！ ……（泣き声のように）結婚しちゃいけない。

若い女 なぜ。

若い男 ……あいつが、あいつのほうから結婚したいって本当に云ったの。うそなんだろ。ミッチちゃんのほうから云い出したんだろ。

若い女 ……ええ。

中年の女 （かすかに）ミツコ……。

若い女 ……アンドリウに、女のひとがいるっていうの？それを私におしえたいの。

若い男 ……そうじゃない。

若い女 ……結婚のこと、私のほうから云い出したなんて、なぜ知ってるの。彼があんたにそう云ったの。

若い男 彼にはもう会ってないって云ったろ。絶対にもうつき合わないってきめたんだから。

若い女 なんだか変な云い方ね。……（はっと気がついて）あんた、まさか……。アンドリウは……いや！

いえ、ちがうわ。彼は、レギュラーよ。私のこと、完璧に愛してくれたわ。……マモル。

若い男 ……

若い女 おしえて。……彼は、男のひとのことも好きなの？ 愛せるの？

若い男 そんなこと、おれ。

若い女 あんたのことを愛したの？　もしかしたら、私以上に。

中年の女 ミツコ……。

若い女 ……マモル。私、わからずやじゃないわ。アメリカでは同性愛が半ば公認されてるのよ。男と男、女と女、一緒に住んでるカップルがいっぱいいるのよ。それをどうこうは思わないわ私。でも、もしアンドリウがホモ・セクシアルだったら、なぜ私に近づいたの。なぜ私を愛したの。男も、女も、両方なんて、いや。いやよ！

若い男 だから……だから結婚はやめたほうがいいって……

若い女 マモル……やっぱりあんた……。ああ……いや！（走り去る）

中年の男 ミツコ……。

中年の女 ……マモル。……あんた……。本当なの？　本当のことなの？

若い男 ミっちゃんのために、おれ、本当のことを云ったんだ。

中年の男 ……おまえ、アンドリウに、やられたのか。

中年の女 そんな云い方やめて！

中年の男 なぜおれかお母さんに打明けてくれなかった。ミツコに直接云うなんて。

若い男 おれ、誰にもだまってるつもりだったんだ、一生！

中年の男 ……ケイコ、ミツコを一人にしておいちゃいけない。

中年の女 （はっとして）はい……。　（退場）

中年の男 なんていうこった。アンドリウに、アメリカ人に、息子と娘を、侮辱された……。　（急に吐き気

のような嗚咽がもれる)

老人 すまなかった！ 私が悪かった。私のレクチャーがマモルとミツコをおかしくしちまった。ノブオ。マモルとミツコは私に気をつけて調子を合わせてくれたんだよ。多分それだけのことなんだ。近頃の子供は妙なところで親切なんだよ。そう、二人はまだ子供なんだ。

中年の男 ちくしょう。アンドリウのやつ。(アンプに近づく)

若い男 お父さん。またオーディオでごまかそうっていうの。やめてくれよ！

中年の男 おれが、何をごまかした。いつ、ごまかした……

中年の女が戻ってくる。

中年の女 ミツコ、どこにもいないわ！ 私、見てきます。キーは？ 車のキーは、どこ？

若い男 ……(キーをとる)

中年の男 (キーを奪って) おれが行く。おまえはうちにいろ。

若い男 ミっちゃん、海岸へ行ったのかも。

中年の男 なぜわかる。どうして海岸へ。

老人 そうだ、海岸だ、海だ。……愛子。おまえも一度、私に理不尽な折檻をうけて海へ入ろうとしたことがあるね？ しかし愛子のかえってきた。私のところへかえってきた。大丈夫だよノブオ。ミツコはかえってくるよ。

若い男 お父さん！ 早くしないと。(戸口へ)

中年の男 ああ。……おまえはうちにいるんだ。ミツコに顔を見せるんじゃない。

若い男 顔を見せるな？ うちを出て行けっていうの！

中年の男 いや、うちにいる。いるんだぞ。(退場)

中年の女 マモル。おじいちゃんとおばあちゃんを、お願いしますよ！(退場)

若い男 ……(CDをスタートさせようとするが、思いとどまる)

老人 ……(異様な形相で宙をみつめている)

老女 ……(やはり、じっと正面を向いている)

老人 ……(そっと老女を見て、すぐ向き直る)

老女 ……あなた。

老人 うむ？

老女 ノブオ。泣いてましたね。かわいそうに……マモルは、陰間かげまだったの……。

若い男 カゲマ？……(何となくわかって)ちがう、ちがうよ！

老女 ……。

若い男 おばあちゃん！

老女 (すっと立って)騒がしい一日だったわ。選挙のせい？ いいえ。……あなた。誰がなんと云って

も、私は池子の森へ行きますよ。誰も私をとめることは。

老人 愛子。……おれの云うことがなぜわからないんだ。

老女 私は、愛子ではありません。あなたは徳富健次郎ではありません。あなたがおかしくなるのは私たちが徳富夫妻だと思いきはからですよ。わけもなく嫉妬に狂って、妻の近くに男を一切よせつけず、うたが

いにかけては妻を打ちすえ責めさいなみ、果ては頑是ない子供のよう泣いて、妻をひしと抱きしめる……。そんな夫婦では、私たち、ないんです……。

老人 いや。それほど私は、おまえを愛しているんだ。おまえも私を。……愛子。約束してくれ。池子の森へはもう行かないと誓ってくれ。……（乱暴にせまって）愛子！

老女 ……。

老人 返事をせんか。

若い男 おじいちゃん！（うしろから抱きとめる）

老女 大丈夫。手を放して。

若い男 ……。

老女 あなた。第一高等学校の弁論部の方に依頼された講演の草稿、もう出来上がったんですか？

老人 （力を抜いて）ああ。出来たよ。机の上に置いてある。読んでごらん。

老女 まあ、読んでもいいんですか私。

老人 私の書くものはいつだっておまえが最初の読者じゃないか。

老女 じゃあ……拝見します……。 （と、若妻のようにはしゃいで退場）

若い男 ……。

老人 ……マモル。……おまえだけに打明けよう。おかしくなっているのは、アキコなんだよ。おばあちゃんなんだよ。

若い男 ……。

老人 私が蘆花先生になり、アキコを愛子とよぶ。するとおばあちゃんは落着くんだ。私は愛子じゃありません。

せんと云いながら、もっとそう呼んでと心の中では云っている。だから私は……、アキコの魂があぶない
と思った瞬間に蘆花先生になって嫉妬に狂う。得々と思いを披瀝する。……たいへんなんだよ、アキコの
お守りをするということは。

若い男 ……。

老人 まだうたぐっているのかい。おかしいのはやっぱり私のほうだと思ってるのかい。

老女、草稿を手にして戻ってくる。

老女 あなた。すばらしい原稿！ それに、題がすごいわ。……謀叛論。……あなたは幸徳秋水先生以下十
二人の人たちの命乞いの演説をなさる予定だったのね。それが演説の草稿もでき上がらないうちに十二人
の方、死刑になって……。

老人 全くひどい話だ。政府は判決から五日目にはもう殺しちまった。それに対してことあげする者が誰一
人ない。おれはしゃべるぞ。幸徳等十二人は謀叛人だしかし正義の士だと、はつきり云ってやる。

老女 でも、天皇陛下のおいのちをあやうくするような、そんな計りごとをめぐらした人々を弁護したりし
て、大丈夫ですか。

老人 私の敬愛する天皇のためにも云わねばならんだ。首相桂太郎、桂の親分山県有朋は、うそからまこ
とをこしらえ、十二名の忠義の士を殺した！ そう。彼らはまさに、日本の苦しみを苦しみ、日本の行く
末を案じた忠義の士だ。

老女 (草稿を読む) 諸君、幸徳秋水以下十二名は、時の政府に謀叛人と見なされて殺された。だが、謀叛

を恐れてはならぬ。謀叛人となることを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である。古き教えのみにしたが、云わせらるるままに云い、させられるままに振舞い、型から鑄出した人形の如く、一様に生活の安定を追い、一切の自立自信、自化自発を失う時は、すなわちこれ、人間の死、靈魂の死の時である。我々は生きねばならぬ。生きるためには謀叛しなければならぬ。くりかえして云う。諸君。我々は生きねばならぬ、生きるためには常に謀叛しなければならぬ。自己に対して。また周囲に対して。

老人 ……明治四十四年、一月二十四日、幸徳秋水、新村忠雄、宮下太吉、古河力作、内山愚堂、大石誠之助、森近運平、奥宮健之、成石平四郎、新見卯一郎、松尾卯一太の十一名、翌二十五日に菅野スガ一名、計十二名が絞首台に……。(はっと気がついて) ……十二名。 ……十二少年!

老女 ……

老人 愛子。

老女 どうしました。

老人 明治四十三年一月二十三日。ちょうど一年前だ。日も一日しかちがわない。なぜ今まで気がつかなかったのか。七里ヶ浜沖の十二少年の死は、大逆事件による十二名の死の、前触れだったんだよ!

老女 ……

老人 ああ、いずれを悲しむべきか。逗子開成生徒十二名は、政治的謀叛人十二名のさきのまつりとして死んだのか。それとも、幸徳以下十二名が、十二少年のあとのまつりとしていけにえになったのか……。それは神のみぞ知るとはいえ、この私は、さきの祭りにもあとの祭りにも司祭として立会ったのかも知れぬ。ああ……。呪われしは徳富健次郎。罪深き者、徳富蘆花……。 (と、退場して行く)

若い男 …… (呆然と見送る)

老女 ……マモル。おじいちゃんをそんな眼で見えてはいけないわ。……あのひとはね、自分を蘆花先生だと思ひ、私を愛子夫人と思うことで、やっと魂を支えているの。あの人が本当におかしくなってしまうやないように私は、蘆花先生の本を一生懸命に読んで、大事なところはきちんとは暗記して、それはもうたいへんなのよ。でも、大丈夫。私が生きていくかぎり、おじいちゃんは大丈夫よ。……じゃあ、おやすみ。（退場）

若い男、一瞬の真空ののちに、

若い男 ああ、もう！（と、奇妙な悲鳴を上げて、アンプに突進する）

マーラーの第五番、第五楽章冒頭が流れ出す。うずくまる若い男。
じっと聴きいる。

若い女がそつと家に戻ってくる。

三十秒、一分、一分十六秒……。若い女があらわれる。

若い男 ……（若い女に気がつく）

若い女 ……（だまって見つめる）

若い男 （CDをカットして）お父さんとお母さんに会ったの。探しに行ったんだよ。

若い女 ……（立ちどまる）

老女 (登場しながら) マモル。お父さんの真似をして音楽なんか。……ミツコ! ……よかった。(奥へ叫ぶ) あなた。ミツコが戻ってきましたよ。ミツコ、無事でしたよ!

老人 (登場して) ……ミツコ。……やっぱりかえってきてくれたね。よかった。

老女 心配していたのよ?(老人に) あなたの云う通り、戻ってきてくれた……。

老人 うむ。

老女 お利口さんねミツコ……。さ、なんにも考えないでおやすみなさい。ね?

老人 彼氏はやっぱり、日本人のほうがいいよ。そう思うよ私は。

老女 ……(うなづく)

老人 じゃ。(老女の肩に手をまわし、退場して行く)

若い男 ……

若い女 ……すこし歩いたら、おちついたわ。……マモルも、あんまり深刻に考えないほうがいいわ。

若い男 ……おじいちゃんとおばあちゃん、どっちがおかしいと思う?

若い女 おかしいのはおじいちゃんのほうじゃないの?

若い男 それが、わからなくなっちゃった。おじいちゃんは、本当はおばあちゃんがおかしいんだって云う

し、おばあちゃんはおじいちゃんがつて、お互いがお互いをお守りし合ってるんだよ。

若い女 それならそれでいいじゃないの。それで安定しているんだったら。

若い男 まあね。でも……、おれはどっちかといえは、おばあちゃんのほうじゃないかと思う。ほんとはし

やべりたくない。それでももう秘密なんておれにはないから、誰にもほんとは云いたくない。でも……。池子の森の、おばあちゃんがいつも行くところに着いたら穴があるんだ。ここは私のご不浄だから入

るんじゃないよっておばあちゃん云ってた。おれもそのことほんとして一度も入らなかったんだけど、この間、あんまりおばあちゃんほら穴に入って出てこないから見に行ったんだ。そうしたらおばあちゃん、なんだか人形みたいなものを手にぶつぶつ云ってた。おれを見ても、べつに怒らなかつた。これは、私の人形。(次第にフシをつけて)わたしの人形、よい人形、眼はぱっちり、色白で、小さい口もと、愛らしい、わたしの人形は、よい人形……。そううたって、戦争になってもここは大丈夫だって人形を枯葉の吹きだまりのなかへ大事そうにしまった……。その時はおれ、おばあちゃんの気持が自分の気持にもなっちゃまって、おかしいと思わなかつた。でも、やっぱり……。 (泣きそうになる)

若い女 マモル……。

若い男 ……。

若い女 しっかりして。

若い男 ……ああ。

若い女 ……私、アンドリウとは、もう会わないわ。 ……あんたは？ ……愛し合ってもいいのよ、 ……アンドリウと。それよりほかに方法がなければ、誰のことも愛さないよりは、そのほうが……。

若い男 おれにそんなこと云わないでくれ、おれ、わからないんだ。自分でもわからないんだ。 ……アンドリウとおなじなのかもしれない。それだけはいやだってミっちゃん云ったね、男も女も……。それだけはいやだって。

若い女 それも自然なのかも知れないって考えて、それで私、おちついたの、私は、男の人を愛したいし、男の人に愛されたいけど、セックスって、セックスの愛って、ただ子供を生むために人間にあたえられているものではないのかも知れないわ。 ……自信を持ちなさいよマモル。自分は、異常な人間だって、何か

の犠牲者なんだって、そんな風に思ってしまったらおしまいよ。

若い男 ……姉ちゃん。

若い女 (かすかに笑って) あんたが姉ちゃんって私のこと云うの久しぶりね。いつから云わなくなったのかしら……。

電話が鳴る。若い男が出る。

若い男 ……はい、赤沢です。

中年の女の声 ミツコ、見つからないのよ! もしかしたらうちへ戻っていやしくないかと思って……。もしも。海岸をもう一度探して、もう一度電話しますからね。……もしもし。

若い男 ミっちゃん、今帰ったよ。

中年の女 え? 本当なの!

若い男 うん。

中年の女 なんて、なんで早く云わないの、うそじゃないのね。本当にミツコ、そこにいるのね?

若い男 うん、いるよ、ちよっと待って。

若い女 (受話器をうけとって) もしもし。

中年の女 ミツコ! あんた……、

若い女 すみません。

中年の女 ……いいのよ、……すぐに、すぐに帰りますからね。(泣き声で) よかったわ……。じゃあね。

(切れる音)

若い女 …… (受話器を置く)

若い男 …… 水割り、飲む？

若い女 うん。

若い男 (水を入れながら) …… 海岸へ行ったの。

若い女 途中で、ひき返したの。 …… うちへ帰ろうって決めてからも、すこし先まで歩いてしまった…

…。 海岸まで一応行ってみようかかって。でも、みんなが心配してるだろうと思って…。

若い男 行つてればおふくろたちに会つてたかな。おれが、海岸かも知れないって云つたら、そうだ海岸だ

つておじいちゃんが叫ぶもんだから、おやじとおふくろ、浪子不動のあたりへ直行した筈だよ。

若い女 そう…。どこで行きちがいのなつたのかしらね。

若い男 …… (アンプの方へ行きながら) なにか、音楽聴きたくない？ シンフォニーじゃないやつ。

若い女 いいわね、ラジカセもってくる。(退場)

若い男 ……

若い男、水割りのグラスを二つ、テーブルに置く。ひと口飲んだあと、自分のグラスをもうひとつのグラスの先端にそつと触れさせる。

そのとき、

ドアーズの“まぼろしの世界”が流れ出す。

ラジカセをさげて、若い女が戻ってくる。

若い男 ……ジム・モリソン。

若い女 そうよ。(坐る)

若い男 ……ジム・モリソンは自殺したの？

若い女 知らない。自然死よ多分。自殺じゃないと思う。

若い男、じっと聴きいるうち、立ち上がり、曲に合わせてからだを動かしはじめる。

動きは小さいが、ちょっとコミカルで、リズムを繊細にとらえている。若い女も、若い男を見つめながら、自分をロックする。

曲が終る。

若い男 ……おれ、寝るよもう。おやじとおふくろが戻ってきた時、おれがいないほうがいいだろ。

若い女 ……(うつむいて嗚咽をこらえる)

若い男 ……どうしたんだよ。また落ちこんじまったみたいじゃないか。

若い女 あたし、ひとりで暮そうかな。どこかアパート探して。

若い男 なんてそんなこと急に。

若い女 急に今考えたから云ったのよ。いけない？

若い男 ……うちを出たら、おやじが淋しがるよ。

若い女 あんたは？

若い男 ……

若い女 あんたも、淋しい？（近づく）

若い男 （しりぞいて）なんだよ、なんだよその態度……。ミっちゃんもおかしいんじゃないのかい。

若い女 うちを出たほうがいいのはマモルのほうかも知れないわね。ひとりて暮らしてみれば？

若い男 おれは、まだ、そんなこと出来ないよ。大学へ入るまでは、まだ。

若い女 そう云ってるうちに手おくれになるわよ。……。マモルはもしかしたら、自分の一番近くにいる女の

ひとが好きなのよ。つまり、お母さんと私。……。それだけのこともかもしれない。思い切ってひとりになれ

ば普通になるわよきつと。

若い男 おれをサカナにして勝手なことほざくなよ！ 沢山だよもう！

若い女 ……わかったわ。（だまりこむ）

若い男 ……

車の音がきこえる。

若い男 帰ってきた。

若い女 私、おちついて寝たって、そう云って。

若い男 卑怯じゃないかそんな。（扉の音がきこえる）

若い女 （立ちどまって）……。いいわ。ここにいるわ。……。あんたはもうおやすみなさい。

若い男 ……そうする。（奥へ行くこうとすると）

中年の女、登場。

若い男 ……

若い女 ……

中年の女 ミツコ……。

若い男 じゃ、おやすみ。(退場)

中年の男、登場。

中年の男 (荒い息づかい) ……おまえ、どの道を歩いて……、海岸へは行かなかったのかい。

若い女 なぜみんな、私が海岸へ行った海岸へ行ったっていうの。私をそんなに自殺させたいの。

中年の男 馬鹿! ……素直じゃないなおまえは。いつからそんなに。

中年の女 おじいちゃんとおばあちゃんももう、あなたの帰ってきたこと知ってるのね。

若い女 ええ。

中年の女 じゃあ、話はあとにして、あなたももうおやすみなさい。

中年の男 おまえらしくないな。ミツコと、とっくり話さなくちゃいけないのは今だ。今しきやないよ。

若い女 そうかもね。マモルとは、すこし話したわ。

中年の男 ……なにを。

若い女 云う必要、ある？

中年の男 ……まあ、いい。マモルはもう寝たのか。

若い女 ええ。

中年の男 おまえも、もうおちついたんだらうね。

若い女 大丈夫よ私。……きめたの。アンドリウとは、結婚しないわ。

中年の男 ……そうか。

若い女 でも……、アメリカへは行くわ。

中年の男 ……。

若い女 お金をためて必ず行くわ！

中年の男 ……そんなにおまえ、アメリカへ行きたいのか。

若い女 ええ。

中年の男 アメリカをいったいどんなところだとおまえは、

若い女 だから、それを直接行ってたしかめたいのよ。

中年の女 なぜ？ なぜそんな気持ちになったの。

中年の男 今はね、ミツコ、トーキョーが世界でいちばん活気のある都会なんだぜ。ニューヨークより、ロ

サンゼルスより。

若い女 私はニューヨークやロサンゼルスにあこがれてるわけじゃないわ。どこでもいいのよ、ハワイじゃ

しようがないけど、アメリカ本国であればどこでも。そうなんだわ、アメリカは本国っていう感じなの。

だから行ってたしかめたいんだわ。

中年の男 おまえは日本人だろう。日本人の本国は日本だ。感じがどうのこうの云ったってしようがないよ。

若い女 どうしてしようがないの。

中年の男 どうしてって……。

若い女 私、べつに、国籍を変えてアメリカ人になりたいとは思ってないわ。意外と意志が弱くて、アメリカへ行ってもすぐ日本へ帰って来てしまうかも知れないけど、一応は本国の土を踏んでみたいの。踏むだけじゃなくて住んでみたい……。

中年の男 アメリカを本国本国なんて云うな！

若い女 そう云いたいわけじゃ……。無理に訊くから答えただけよ。

中年の男 要するにおまえは、日本よりアメリカのほうが面白そうだと思って、それで行ってみたいと思ってるだけだ。

若い女 そうねきつと。

中年の男 そんなに、日本はつまらないかい。いや、そんなことを訊く必要はない。問題は、唯面白そうだからってそれでアメリカに住みたい気持ちになる、それが問題なんだ。

若い女 アンドリウが云ってたわ。日本ってアメリカとは全くちがう国なのに、なんだか外国のような気がしないって。

中年の男 ……外国のような気がしない？ 日本が？

若い女 ええ。ハワイと同じように、アメリカの一部っていう感じがするから、それで住み心地がいいのかも知れないって。日本人がみんなもうすこし英語が上手になって、アメリカ人がもうすこし日本語がわか

るようになる、日本はそのままアメリカの五十一番目の州になれるって、そう云ってたわ。

中年の男 冗談じゃない、それはアメリカ人の傲慢でもんだよ。

若い女 そうかしら。私は、なんとなく納得したわ。でも自分をアメリカ人とはとても思えないってアンドリウに云ったら、今のところアメリカ本国でも自分をナチュラルにアメリカ人と思える人間はむしろ少数なんですって。アメリカ人っていうのは、自分はアメリカ人だって自分にも他人にも毎日宣言している人間のことをいうんですって。ぼくはヤンキー。ニュー Yorker。それがナチュラル。そして、ぼくはアメリカ人。それが宣言。だからきみも、日本生まれのアメリカ人に気持次第宣言次第でいつでも立派になれるって。

中年の男 なにが立派になれるだ……。おまえ、アンドリウにそう云われて、よろこんだのか、感激したのか。え？

若い女 ……難しい質問ね。

中年の男 真面目に答えろ。

若い女 真面目にいま考えたから難しい質問だって云ったんだわ私。

中年の男 難しい質問でもなんでもないよ。

若い女 じゃあお父さんは、ナチュラルに思えるの。日本人だって。おれは日本人だって。

中年の男 もちろん……（云いよどむ）

若い女 本当に？ ……お母さんは？

中年の女 ……。

若い女 ねえ、答えて。本当はそう思えないとしても恥ではないと私は思うわ。思えなければ思えないっ

て、はっきり言うべきだわ。云わないでごまかしてるほうがよっぽど恥ずかしい。

中年の女 ミツコ……。

中年の男 ……とにかく、おまえがアメリカ人にならないことを、おれは希むよ。理屈じゃない、気持だ。

……アンドリウとはほんとに結婚しないね？ もう、会わないね？

若い女 もう会わないって、マモルには云ったの。でも、友達として会うかもしれないわ。これからも。

中年の男 おまえ、アンドリウがいつペンにいやになってそれで外へとび出したんじゃないのか？

若い女 とび出して海岸の方へ行こうとした道と、うちへ帰って来た道、おなじ道だったけど、私は変って

た。時間もすごく長い時間のような気がしたわ。その間に私、すこし進歩したのよ……。今は許せるの、アンドリウのこと。

中年の男 許せるって、何を、どう……。かたっぽうに女の恋人、かたっぽうに男の恋人を置いて、適当に、いいように遊ぶのを許せるっていうのかい。

若い女 その二人の恋人のうちの一人にわたし、ならないと思う。でも友達にはなれると思うの。なりたいの。

中年の男 なぜ。

若い女 アメリカ人だから。

中年の男 アメリカ人だから？

若い女 面白いのよ、アメリカ人って。

中年の男 なにが……。どこが……。

若い女 (奥へ行きながら) だから……、それを、たしかめたいの。

中年の男 ミツコ。

若い女 (振り向いて) マモルは、普通よ、とても。……大丈夫よ。……おやすみなさい。

若い女、退場。

中年の男 ……ミツコが無事だと聞いた時、どんなに嬉しかったか。そうしてさっき、ミツコの顔を見たとき、ミツコが生れた時から今までのことを全部思い出して泣きたいような気持になったよ。それが、今はまた……、遠くへ行ってしまった。無事ではいるが、遠くへ……。マモルと話したって云ってたね。二人で、何を話してたんだろう……。

中年の女 ……。

中年の男 ……ケイコ。

中年の女 ……わたし、淋しい。

中年の男 ……。

中年の女 あなたの、淋しさと、多分ちがうと思うわ。私は、ミツコの云うことよくわかるの。でもついて行けない。それが淋しいの。

中年の男 そんなこと云っちゃいけない。おれたちは子供たちとはちがう筈だ。ちがわなけりゃいけないんだ。そうだろう。

中年の女 ……ええ。……そと、明るくなってきたわ。……あなた、すこし寝ないと。

中年の男 寝られやしない。……きみは、あしたも宣伝カーに。

中年の女 ええ。

中年の男 仁本さん、勝つと思うかい。

中年の女 市長は仁本さんになると思うわ。そのあと私たち、市議会をリコールして、住宅反対派議員が過半数になるようにしたいの。その態勢がととのえば、国もかなり困ると思うわ。

中年の男 国をかなり困らせれば、それでいいのかい。

中年の女 ……あなたは、国に勝つ見込みは、結局ないって、そう思っているんでしょね。

中年の男 わからない。自分と、国との距離が、見えなくなっているのかも知れない。……きみには、見えるのか？

中年の女 国も自分も、眼には見えないわ。でも、それを繋いでいるものは、あるのよ。お互いを縛っているものが。私たちそれを信じてるの。そうして国に縛られるだけではなくて、自分たちが国を縛ることもしなければって、そう思ってる。

中年の男 ……つまり、デモクラシイ。

中年の女 そう云ってかたづけてしまわないで！

老人の声 (急にきこえてくる) 自然と人生！

中年の女 ……おとうさん、まだ。

老人の声 心あらん人に見せるときは、此頃の富士の曙、午前六時過、試みに逗子の浜に立って望め。眼前に

は水蒸気渦巻く相模灘を見む。

老女の声 あなた、そんな大声を出して。まだ夜明け前ですよ。

老人の声 そう。まだ夜明け前だ。(朗読をつづけて) 諸君！ 寒を忍びてしばらく立ちて見よ。一抹の薔

薇色の光、一秒一秒富士のいただきに向って這い下るを、認むべし。丈、五尺、三尺、しこうして寸。富士は今、眠りより醒めんとすなり。

老人、あらわれる。書物を持っている。老女もつづいて登場。

老人 今、醒めぬ、見よ、ただきの東の一角ばら色になりしを。請う、またたかずして見よ。今富士にかかりし紅き霞は、見るがうちに富士の暁闇を追い下ろして行くなり。（舞台を一周して行く）見よ、闇を追い行く曙の足の速さを。伊豆の連山すでに桃色に染まりぬ。請う、眼をかえして富士の下を望め。紫におう江の島のあたりに、忽然として帆のひらめくを見む。海すでに醒めたるなり。……さらに立ちて、諸君が影の長く前に落つる頃にいたらば、相模灘の水蒸気ようやく収りて海光一碧、鏡の如くなるを望む。この時眼をあげて見よ。群山紅あせて、空は極めて薄きブルシャンブルーとなり、白雪の富士、天高くそびゆるを見む。ああ、心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙……。

老女 見に行きましようかあなた。これから。

老人 まだまだ。冬のさなかの海岸だよ、蘆花が推奨しているのは。

老女 そう、じゃあ、冬がくるまで、待ちましよう。

老人 ……待ちましよう。（老女と共に退場）

中年の女 ……おとうさんとおかあさんは、日本人。……ナチュラルに。

中年の男 国境が、国境線がこのうちのなかを通っているみたいだ。マモルとミツコは年寄りたちの反対側にいる。

中年の女 私たちは、線上に、国境線の真上にいるのかも知れないわ。

中年の男 その線は純粹に幾何学的な線かい。だとすれば面積はない。場所ではない。おれたちがその上に本当にいるということは、おれたち実は、存在していないということだ。

中年の女 でも、……存在しているわ！

中年の男 ……どこに。

中年の女 ここに。見えるでしょう私が。あなたも存在してるわ。見えるわ。……ねえ。私を見て！

中年の男 (まだ見ずに) ……きみと初めて会ったのは、劇場だったね。

中年の女 そうよ。

中年の男 芝居がはじまった時は、お互いまだ顔も知らなかった。ぼくは会社の同僚と一緒にだった。きみもだ。その同僚同志が知り合いで、それでぼくときみも知り合いになった。幕間の休憩時間に。

中年の女 すぐ私たち、お互い夢中になったわね。……そうでしょう。

中年の男 そう。なんであんなにぴったり、気が合ってしまったんだろう。

中年の女 今だって合ってるわ。

中年の男 そう。合っていると、思う。でも、二人とももう、存在していないとしたら……存在していないとしたら……

中年の女 あなた。しっかりして。

中年の男 ……二十五年前には、おれも何かかにか知ってはいた。しかし今ではなんにも覚えていない。何ひとつ……。

中年の女 ……。

中年の男 ことによったらおれは人間でないかも知れない。ただ手も、足も、頭もあるような振りをしてい
るだけかも知れない。ことによったら、おれはまるで存在していないのかも知れないぞ。おれは唯歩いた
り、食ったり、寝たりしてるような気がするだけかも知れないぞ。ああ……もし存在していないとした
ら、……存在していないとしたら……。

中年の女 よく覚えているのね、あの時の芝居。チェプトイキン。

中年の男 チェプトイキンは、初めから終りまでおんなじことを云ってた。ある時は暗くある時は明るくあ
る時は酔っぱらってある時は真面目に。そうして、あの悲しいラストシーンで、オリガが一生懸命に、生
きて行きましたよう。私たち生きて行きましたようってイリーナとマーシャに云っているとき、チェプトイキ
ンは、鼻唄をうたっているんだ。ロツキング・チェアをロツクしながら、タ・ラ・ラ、ブムビヤ、シジ
ウ・メ・トウムベヤって、鼻唄をうたっているんだ！ オリガが、心にやつのこっている声を、やっ
の思いで言葉にして、私たち生きて行きましたよう、音楽はあんなに楽しそうにあんなにうれしそうに鳴っ
ている、私たち生きて行きましたようって云っているのに、チェプトイキンは、唯もうらあらあと鼻唄をう
たってるんだ。存在していない者が、どこでどう鼻唄をうたおうと自由だと云わんばかりに。いや、チェ
プトイキンにできることはもう鼻唄をうたうことぐらいしかないんだ。きつと、そうなんだ……。

中年の女 ……あなた。音楽を鳴らして。めいっばい。……楽しそうに、うれしそうに音楽を鳴らして。…
…早く。

中年の男 ……(妻を見る)

中年の女 ボリウムをフルに、フルに上げるのが夢だってあなた云ったわね、あの時のあなた、本当に生き
生きしてたわ。さあ、聞かせてちょうだい。なんでもないじゃないの、ボリウムのツマミをいっばいにな

わすのよ。そうすれば、チェプトイキンの鼻唄なんていちころよ。（アンプに近づき、電源を入れる）
中年の男 みんながまた起きてくるぞ。これ以上つづけたら、このうち、ぶっこわれてしまうぞ！
中年の女 いいわよ、ぶっこわれても！（CDをスタートさせる）

マーラーの第五番、第五楽章のコラールがあふれ出る。

中年の男 ……（アンプに近づき、そっとポリウムコントロールに手を触れる）

中年の女 ……（夫の手の上に自分の手を重ね、すこしずつポリウムコントロールを回転させはじめる）

朗々と金管のコラールがたかまる。音は、八時のレベルをとうに越え、十時、十一時、十二時を越える。三十秒……、一分……。

若い女、若い男、老人、老女が、あらわれる。

寄り添って手を重ねている二人を、四人が見つめる。

限りなく逸脱してゆこうとする音楽を、おさえるように、幕が下りてくる。

底本.. 『八木柗一郎戯曲集 第2巻』

白水社

1992年5月10日印刷

1992年5月28日初版